

# 城北会千葉支部会誌

第6号

平成 21 (2009) 年 11 月

城北会千葉支部

## はじめに

ここ1年の千葉支部の活動を振り返ってみますと、まず、1月に幹事会を開きました。この時の議題は毎年この千葉支部会誌に載せています先輩インタビューを今年はどうなかにお願いするか、また今年の千葉支部総会でどなたに講演をお願いするかでありました。

佐藤正弘幹事(S34)より発言があり先輩インタビューは多湖輝(たごあきら)氏(S18)、また講演は元経済企画庁事務次官・糠谷(ぬかや)真平氏(S34)にお願いしたらどうかと提案され、出席幹事の了解を得て交渉することとなりました。

先輩インタビューについては、これも佐藤正弘幹事のご助力で多湖輝先輩のご了承が得られましたので、4月に多湖先輩がお住まいのマンション(中央区月島)を訪ねて、そこの最上階にあるレストランで先輩のお話を伺うこととなりました。齋藤前支部長(S29)、斉藤副支部長(S32)、本橋事務局長(S34)、佐藤正弘(S34)、岩田佳郎(S35)、岡田光正(S35)の各幹事と小生が出席しました。

多湖先輩のお話は子供時代、四中時代、千葉大教授時代、東京都でのご活躍とお話は尽きず、気がついたら3時間近く経っていました。詳しくは本文でまとめています。

この千葉支部会誌は今回で第6号となりますが、齋藤前支部長(S29)の支部長時代に「折角の諸先輩の貴重なお話をそのまま聞きっぱなしとするのではなく、会誌にして残したらどうか」というご発案がありスタートして続けているものです。

会誌は斉藤副支部長(S32)がテープ起こしから印刷の手配まですべて取り仕切っており、発行が続けられて来たものであります。

この発行は今のところ会員の寄付によりまかなっており、千葉以外の方にもお話すると読んでみたいとの返事をいただくなど、ぜひ今後も続けたいと考えています。

7月には講演をお願いしました糠谷真平氏(S34)を囲んで講演の内容や当

日の演題等について話し合いました（於パイラスクラブ）。出席幹事は斎藤（S29）、本橋（S34）、岡田（S35）、柏原（S37）の各氏と小生でした。

会員の皆様にもぜひ幹事会にご出席いただき、城北会活動にご協力をお願いする次第です。

城北会千葉支部支部長 尾崎 英二

先輩インタビュー

## 日本硬直化の原因と再生への道

元千葉大学教授・現東京未来大学学長 <sup>たご あきら</sup> 多湖 輝氏(S18卒)

平成 21 年 4 月 1 日 サンシティ EAST にて

<多湖輝氏略歴>

大正 15(1926)年 2 月 25 日 インドネシア スマトラ島  
に生まれる

昭和 18(1943)年 府立第四中学校卒業

昭和 25(1950)年 東京大学文学部哲学科心理学専攻卒業

昭和 26(1951)年 東京工業大学助手

昭和 27(1952)年 東京大学文学部哲学科心理学専攻  
大学院修了

昭和 34(1959)年 千葉大学講師(教育学部)

昭和 37(1962)年 千葉大学助教授(教育学部)

昭和 41(1966)年 「頭の体操」第 1 集(光文社)刊行  
1200 万部もの大ベストセラーになる

昭和 42(1967)年 「頭の体操」で第 2 回書店新風賞受賞  
同 年 (財)才能開発教育研究財団理事長に就任

昭和 44(1969)年 井深大氏とともに(財)幼児開発協会を設立

昭和 48(1973)年 千葉大学教授(教育学部)

昭和 53(1978)年 千葉大学教育学部附属小学校校長に就任(以後昭和 58 年まで併任)

平成元(1989)年 千葉大学退官 同大学名誉教授となる  
同 年 (財)中央教育研究所理事長に就任

平成 3(1991)年 (株)多湖輝研究所を設立 代表となる

平成 9(1997)年 (財)幼児開発協会理事長に就任

平成 10(1998)年 (財)こどもの国協力会理事長に就任

平成 13(2001)年 (財)日本万歩クラブ会長に就任

平成 14(2002)年 心の東京革命推進協議会(青少年育成協会)設立とともに会長に就任  
同 年 (財)山種美術館評議員及び日本創造学会会長に就任

平成 15(2003)年 (社)青少年育成国民会議副会長に就任

平成 16(2004)年 特定非営利活動法人「0 歳からの教育」推進協議会理事長に就任

平成 18(2006)年 瑞宝中綬章 受章

平成 19(2007)年 東京未来大学学長に就任



<インタビュー>

## 日本硬直化の原因と再生への道

いま私は任天堂のDSというゲームの「レイトン教授」の謎シリーズを監修していますが、こんど「世界一受けたい授業」というテレビ番組でもレイトン教授の格好をして登場します。今月末の4月25日(土)夜、日本テレビで放映され、以後、何カ月かに1回は登場することになっています。ところがこの前、収録のときに「頭の体操」にある手錠の縄抜けをいきなりやったら、勘が狂ってミスしました。「いいじゃないですか、先生の失敗も楽しみだから」と言うのでそのまま放映されると思います。

「頭の体操」を原点として、私は今の閉塞感に陥った日本に突破口ができないかと、零細企業でもすばらしいアイデアを持った会社をできるだけたくさん紹介することにしていきます。これを一つの柱にしながら、頭をやわらかくしていこうと思っています。

これからの時代は毎日のように新しい課題が次々と生まれてきます。それをいかにクリヤーしていくかをみんなで考えて、この難局を乗り越えたいというのが私の意図するところです。

### 医療の現状は危機的状況

#### 旧システムの崩壊

いま、医療の世界がかなり崩壊に近い状態です。

問題は情報化が進み過ぎたことです。現在、世界各国で何千という研究発表が毎日のように行なわれています。それを入手しようと思えばインターネットでいくらでも入手できますが、とても見切れるものではありません。しかし医学の世界は命に関わるので「あなた、そんなことも知らなかったの?」と言われると困りますので、みなさん多少は勉強しますが、とても追いつけるものではありません。



だから専門分野を狭くして「私はこの分野については誰にも負けない」というようになってきています。昔は一般外科ですべて片付けていたものが、今は細分化され専門化されています。脳外科、消化器外科などに加えて、血管外科などというものまでできています。しかし人間の身体はひとつのトータルシステムですから、本来、全体が

見えないと適切な判断ができません。

先日、私は糖尿病の学会でスピーチをしましたが、その後で私は参加者に「あまりにも専門用語が多過ぎるように思いますが、先生方わかりますか？」と聞いたら、「いや、よくわからない」と皆さん言っていました。一般の医師免許をもっている程度ではついていけないような、そういう突出した研究がいま行われています。

では実際に、例えばここに一人臨床患者が運ばれてきたとします。お産が差し迫っているが、脳の方がもっと深刻だということを見つけたとします。そこですぐ脳を開いてオペができるかという、そんな神の手を持った医師がすぐいるはずがありません。

学生運動で大学医局と地方病院のつながりが崩壊

その元をただと、研修医制度にたどり着きます。

昔は医科大学の医局が力を持っていて、「お前ご苦労だけど、あそこへ3年ほど行ってくれないか」と地方の病院に派遣していました。「お前、あそこで修行をしてこないと学位をあげないよ」と多少脅しもかけられて、ある種の義務感で辛抱して行ったものです。行けば行ったで、その地域でいかに自分が重要な位置を占めているかなど、いろいろなことを学んで帰ってきたものです。これで全国のバランスが取れていました。

ところがそれを学生運動でつつかれて、“個人の自由意志”で研修医の勤務先が選べるようになりました。その途端、「聖路加病院」など都心の病院に希望者が集中して、青森の外れなどには誰も行きたがらなくなりました。都心の病院に研修医が集まるのは当たり前で、一方では医師不足の病院ができて、患者が“たらい回し”にされて、結局は命を落とすというような問題が現実起きています。

いままで私は赤坂の千葉大系の病院で診てもらっていました。千葉大卒の先生方がたくさんいて「先生、ちょっと問題あるけど、まあいいでしょう」というのでみなパスしてきました。

ところが今ここ（中央区月島）に住むようになったら、すぐ目の前に聖路加病院があるではないですか。聖路加に行くようになった途端、あそこが悪いここが悪いとカテーテルを2回やられました。2回目のときは「本当にやらなければいけないの？」と念を押すと、「一応やらせてください」と言って覗いてみて、「まったくうまくいっています」という。「それだったらやらないでくださいよ」といったことがあります。

私はPSAが高い。「4」が基準値で、私は「7」から「8」ですから、普通の医者だったら「様子を見ましょう」で済んでしまうところですが、「8といえば基準値の倍ですから、一応、細胞診をやった方がいいでしょう」というので、無理矢理やらされました。他所では5～6本で済ませるところを、「当たり外れがありますから、うちは少し丁寧にやりましょう」というので、10数本やらされました。結果「たいしたことはありませんでした。様子を見ましょう」となりました。最初はやはり刺したから刺激で数値が上がったのです。今は下がってきて、「様子を見ましょう」ということになっています。昔だったら知らずに

済んでいたものを、いろいろな検査が発達したお陰でみな病気にされてしまいます。

もう一つは患者自身の問題です。アメリカなみの訴訟社会になってきたことも医療崩壊の原因の一つです。

日本は出生児の死亡率は、いま世界で最も低い。これは誇りにしていいと思います。優秀な医師が揃っていて技術も高い。ところがもし事故でも起きて新生児が死亡したとなると、すぐ病院の責任だ、医師の責任だ、医療ミスだといって訴えられる。産科、小児科では訴訟を抱えていない先生はいないと、みな「やめた」となります。

もう一つは、日本では医師免許さえ持っていれば、どんな科でも自分の好きなところを選べる仕組みにしたことです。これは大きな医療行政上のミスだと私は思っています。ヨーロッパではある程度の枠が決まっていて、その上に行くには勉強しないとイケないというスクリーン（関所）があります。ところが日本では「どこでもいい」のです。そうすると、みな時間にしばられずにお金になるところを選びます。だからいま流行っているのは「美容外科」です。こんなことが現実起こっています。あれこれ考えて見ると、現場の医師が足りなくなるのは当たり前です。

私は、欧米がやっているようにある程度の規制をかけながら、バランスのとれた医療の仕組みをつくっていかねばいけないと思っています。現実には、変なところで官僚が出しゃばって、日本の医療全体を相当におかしくしています。こうなるのは必然ですが、その必然を見ていない。やはり頭が固いか、あるいは変化というものに対する適応力がない。今回のサブプライム問題のような急激な変化なら誰でも気が付きますが、毎日少しずつ変化していくようなスローテンポの変化には誰も気がつかない。しかし3年経ち5年経つと世の中がひっくり返るほど大変化が起きている。それに気づかない。医療の現状はいまそんな感じになっています。

## 教育現場が危ない、子供たちが危ない

### 時代の変化にそぐわない行政

時代の変化を知ろうと思えば、知る方法はいくらでもあります。

例えば物が売れなくなって地方の商店街がシャッターを下ろしている。ところがデパートの安売りの会場に行ってごらん下さい。たくさんの人が来ています。その人たちを見ると、どういう年齢層が、どういうものを好んで買っているかということがわかります。つまり、その気になれば「世の中がどう変わっているか」いくらでも知る方法があります。わかれば手の打ちようがあります。

子供たちの言葉の使い方でも、注意して聞いていけばわかります。学校でも街でもどこでも観察できます。

本来、官僚や政治家は「このまま進むととんでもないことになる」ということに先に気がついて、その方向性を先取りして決めていくのがあるべき姿です。それができていない。

だから、教育現場がいま大変なことになっています。

#### 「モンスター・ペアレント」の横暴

さらに「家庭の中に手は突っ込めない」という問題があります。いわゆる「モンスター・ペアレント」というのがいて、「あの先生、辞めさせよう」というと、たちまちネットで広がって校長室へ押しかけてくる。「あの先生は程度が低いから辞めさせろ」という。人事というのは校長レベルでそう簡単には行かないとわかると、こんどは教育委員会に押しかけていく。

なぜ「モンスター・ペアレント」が生まれるかということ、最近の親は高学歴になって、海外でいろいろな体験をして帰ってくるから発言力を持っている。そこにインターネットの普及で一気に拡散する。それで先生がつぶされるのです。いまの教育現場を見ていると、すさまじいことが起きているのに、みんな“当らず触らず”というところでやり過ごしています。

## 世界から取り残される日本

#### リーダー不在の日本

つい2～3日前に京都大学のある教授がこんな論説を書いておられました。「世論という名の政治的暴論」がまかり通っているとおっしゃるのです。確かに私もそう思います。「あなたは世論からダメといわれていますよ」といって、身を引かざるを得なくなるように追い込まれることが盛んに起きています。

昔は「所得倍増」といったら、その旗印の下に所得が倍増するまでガンガンやる人がいて、そこに皆が夢を託してやったものでした。

今は仮に2大政党ができたとしても、結局そのすり合わせで“折衷案”しか出てこないと思います。「オレはこれを絶対やる」という強烈な意志もった人が出てこない。誰も手を出さない。これが今の日本の政治です。

#### 変化するアジア

つい最近、私はシンガポールで講演を頼まれ、そのあと船でタイ、カンボジア、ベトナム、アモイ、香港、上海を回ってきました。これらの国を見て「本当に日本は取り残されていくな」ということを実感しました。いまの周辺国家はすごいですよ。

シンガポールでは前のリー・クアンユーの息子が首相になっていて、学歴を見て驚きました。オックスフォード大学で学位を取得して、そのあとアメリカのハーバード大にも行って学位を取っている。そういう人がトップの座にいる。あの国は基本的に英語を使っていますので、英語圏に留学することは比較的簡単です。高校で成績がよければ、イギリスやアメリカの大学が受け入れてくれる仕組みができています。ですから優秀な人はみな英

語圏の国に留学しています。

シンガポールは資源のない小さな国ですから人材次第です。まず人を教育してヘッドをつくる。ヘッドさえつくれば、労働者は周辺にいくらでもいます。

日本も遅れないようにするために、私はかなり以前から「最先端科学の研究所をつくるべきだ」と主張してきました。そこに優秀な人を全部集めるのです。

いま、東大が非常にすぐれた方法をとっています。前総長の小宮山さんと軽井沢でゴルフをしましたが、なかなか面白い人でした。彼は「日本の技術レベルは高いのだから、それをもっと社会に開かれたようにしたらいい」とおっしゃっていました。日本の大学は“実学”というのを嫌って、産学協同をバカにする傾向が長いこと続いています。「学問は違うのだ」と大学は言う。私が面白いようなものは「学問じゃない」と思っています。その意味で、私は東大にいたころ「ここにいてもしょうがないな」と思っていました。

例えば、フロイトだとか生きた人間の心理の方が面白くて、「それをやりたい」と私が言うと、「お前、それじゃ卒論は通らないね」と言われました。私は頭の切り替えが早いから、「それじゃ」と教授のお気にめす論文を書いて、さっと出てしまいました。

理系は優秀、文系が危ない

そのころ東京工業大学に宮城音弥教授がおられて、盛んに講演などに駆り出されていました。当時、“話の通じる人”は彼くらいのもだと私も思っていました。そこで私は彼のところに行って「ここへ来たいからポストをつくってくれませんか」とお願いしたら、「いますぐはできないけど、いいですよ」とおっしゃってくれました。

しばらくして宮城先生から電話がかかってきて「建築学の助教授になりたての人で、どういうわけか心理学者と一緒に仕事をしたいと言っている人がいます。会ってみますか？」とおっしゃるのです。私はすぐ飛んでいきました。その人が清家清（せいけきよし）さんだったのです。名刺をいただくと「下から読んでも同じです」と自己紹介をされましたので、「これは面白い人だな」と思い、一緒に仕事を始めることにしました。彼の学位論文に私はいろいろなデータを提供しました。そのうちにポストができたというので、私は東京工業大学に移りました。

そんなことで、私はあまり“学問”をやってきませんでした。大学の特に文系は今まであまりに“学問、学問”し過ぎていた、という感じがしています。

日本の理系は素晴らしい。私が東工大に行ってみて、やはり東工大は優秀でした。理学部、工学部、とにかく理系の人はずいと感じました。

官僚の「事なかれ主義」が硬直化の原因

東大でも文系はあまり感心できるレベルではない。なかでも一番頭が固く育てられてしまうのが「法学部」です。その法学部が政治から官僚の世界まですべてを牛耳っている。これが硬直化の原因です。

例えば、「パイプをつなぎ間違えて一人死んだ」という医療事故が起きたとすると、官僚はすぐ法律や条例をつくって、「こういうことをやりなさい」と全国一律に同じことをやらせる。「コンプライアンス」などという言葉が出てきて、「あなたのところはこんなこともやっていなかったのか」と当事者に責任をかぶせる。役人は責任をとりたくないから、絶対にそういう事故を起こしてはいけないという法律をつくって流します。

入院してみるとよくわかります。例えば私が検査入院すると、名前や生年月日を書いた足かせをカチッとはめられる。「これは退院するまで絶対に外さないでください」と言われます。そこまではいい。病室に入ったら看護師がやってきて、「規定になっておりますので、お名前と生年月日をおっしゃってください」という。5分もするとまた同じ看護師が来て「医師の指示で採血します。規定ですので恐れ入りますがお名前と生年月日をおっしゃってください」という。「いま、言ったじゃないか」と言うと、「いや、規定になっておりますので」と言う。そして私の足かせを見る。これがいわゆるコンプライアンスです。法律どおりやるとそういうことが起きるのです。

とにかく一事が万事、がんじがらめになっている。そこに少子化が進んでますます手が足りなくなってくる。当り前のことです。

わがまま世代の低い定着率

「人権」だとか「自由」だとか、「あなたの好きなようにしていい」ということは、それはそれでいい。「アニメが好きならアニメもいい。ゲームが好きならゲームもいい。それが個性だから」などと言っているうちはいい。

しかしその世界で飯が食えている人が10万人に1人いるかいけないかという、そこを誰も教えていない。だから大学を出て、ふらっと会社に行ってみると「ちょっと違うな。私のやりたいことではない」と、ポッと会社を辞めてしまう。

いま、「七五三」とよく言われます。就職してから3年以内に会社を辞めるのは、中卒で7割、高卒で5割、大卒で3割だそうです。大卒でもちょっと嫌な上役がいると「ああ、こんなところに一生いたくない」と簡単に辞めてしまいます。どうにもならない。

確かにイチローを見て野球をやりたい、石川遼を見てゴルファーになりたいというのは、夢としてはいい。トップクラスに入ればその人たちは悠々飯を食っている。

しかしその世界で食えるようになるには、どれだけ必死の努力をしていることか。血のにじむような努力をしても、上の方に入れる人は一握りの中のさらに一握りです。そこまで行かずにやめていく人がたくさんいます。「それでもいいのか」ということを誰も教えていない。「そんなこと聞いていない」「学校で教えてくれなかった」というのです。

少子化で大学全入の「甘えの時代」が来る

これから少子化が進んで大学が増えて、「大学全入」の時代がやってきます。大学を選ばなければ全員入れるようになります。

そうすると、それを受け入れる底辺の大学が大変です。「引きこもり」もいれば、「モンスター・ペアレントに育てられた甘えん坊」もいる。「授業がちょっと面白くない」となると、プツといなくなってしまう。特に文系の底辺の大学ではそういうことが現実には起こっています。「お宅のお子さん、いなくなってしまうかもしれませんが、家に帰っていませんか」と、そこまでやらなければならない。そうしないと、大卒のレッテルを張って卒業生を出せない。だからやらざるを得ないというところまで来ています。

昔の大学は無責任で、出来が良からうが悪からうが全部卒業させて、受け入れた企業が最終的な研修をやっていました。基本的な人間教育、マナー教育まで企業がやっていた。いま企業がそれをやろうとすると、「あんな厳しい会社はいやだ」と入ってきたばかりの社員が辞めてしまう。とにかく困った状況になっています。

#### 日本の弱点

技術系でいうと、「携帯電話」なら「携帯電話」専門で、それに関わっている技術者は世の中のことを全然見ていない。ただ「携帯」のバージョンアップしか考えていない。どんどん小さくして、今や手のひらに入るサイズで、パソコンと同じような機能をもつようになりました。そこにデザイナーが入ってきて「これを横にすると色も各色そろえてテレビも見られます」と、そんなことばかりやって付加価値をどんどんつけていく。ふっと振り向いたら値段が高すぎて誰も買わない。

中国、インドなど東南アジアには大きなマーケットがある。買いたい人がたくさんいる。それを全部見逃して、金持ちだけに売る商品しかつくっていない。

日本では、例えば日立なら日立のテレビの中を開けて見ると、すべての部品が日立製になっている。パナソニックはすべてパナソニックの部品を使っている。ところが韓国のサムソンのテレビを開けて見ると、この部分は日立が一番優秀で安いからと、日立の部品を使う。この部分はドイツのどこがいいとなればそれを使う。安くていいものを集めて組み立てるだけで、日本製にまったく引けを取らない製品をつくっています。それで何割か安く日本の市場に持ち込まれたら、とてもかなわない。

「グローバル化に負けた」と竹中平蔵氏は言うけれど、私は必ずしも賛成できません。グローバル化といたって、アメリカのやり方が広がっただけで、アメリカの株主を優遇するCEOがいい目を見るような、そういう株式会社の仕組み、そこに大きな金融ファンドが入ってきて、短期間に利益を上げようとする、そんな仕組みがグローバル化です。

CEOの任期は大体5～6年です。その間に株価をつり上げて、それが自分の利益につながるような仕組みが出来上がっている。だからアメリカのCEOは年俸50億も70億も取って、プライベートプレーンで飛び回っている。そういうことを平気でやっています。

## 金融工学が国を滅ぼす

「金融工学」というおかしな学問がいられています。元は航空工学です。あらゆる気象条件のファクターを完全に取り込んで、それを分析してその結果に基づいて着陸すれば、どんな悪条件でもすんなりと着陸できるという、そういうロジックです。

このロジックが金融の世界に持ち込まれました。条件をきちっとコントロールしていくと、お金が自然にどんどん増えていくシステムです。

私はこれをアメリカの「国家詐欺」だと言っています。その結果が「サブプライムローン問題」であり「リーマン・ブラザーズ問題」であり、世界同時不況だったのです。

「あんなことをやっていたらとんでもないことになる」と私たちは知っていました。証券化して分けると危ないという声があがったので、今度はそれに超優良株と抱き合わせて並べて売りを始めました。それを「トリプルA」だといって、アメリカの一番信用ある金融会社が保証をつけて売り出したから皆が買いました。そしたらそれが一気に崩れ落ちたのです。それが今度の金融不況です。

日本の株式も客の6割が外国人だという、こんな構造をいつまでも放置しておくのはおかしい。外国人は日本の企業に対して忠誠心などまったく持っていません。つぶれようがどうしようが、とにかく儲かればいいという人たちですから、「危ない」となったらさーっと引きあげて、株価がドーンと下落しました。当たり前です。

## マスコミの弊害

今回の金融不況は、日本の実態からしたらそんなに深刻ではないとは思いますが、もうひとつ困った問題があります。

怪しげな世論、特にマスコミが少し強くなりすぎました。いまや経済も、政治も、教育も、何でもかんでも動かしているのがマスコミです。マスコミが「だめだ」というと、政治家の間でもこれが世論だと思って議論されるようになっていきます。

## 開発テンポの速い中国、遅い日本

中国は、現時点でも1日およそ20万人ずつ人口が増えています。

一人っ子政策を厳しくやっていて、二人目からは戸籍を与えない。戸籍のない子はみな農村なら食えるというので農村に行く。これを「盲流」と言いますが、これがいま都会に押し寄せて来ています。だから都市部は本来の人口の何割増しかになっています。それが今度の食中毒事件などでみな引かされました。大混乱ですよ。

中国ではいま人口を13億人といっていますが、実際は14億人、15億人という声が聞かれるくらいの方が中国にはいるのです。

ご承知のように、農村部の生活レベルは非常に低い。この格差が非常に大きな問題になってきています。

鄧小平氏が「一国二制度」、つまり沿海部は特別扱いで、市場経済を取り入れて資本主

義国と同じようなことをやっています。私どもが行くたびに高層ビルが増え、工場が増えています。日本が高層ビルを 100 本建てている間に中国では 2000 本くらい建てている。驚くべきテンポです。

なぜそんなことができるかという、中国では土地がすべて国有地だからです。「お前、ここをどけ」と言われたらどかざるを得ない。文句をいうと兵隊が出てくる。

だから、来年、上海で万博をやりますが、以前住宅地だったところがきれいに取り払われて広い公園になっています。やることは速い。

日本では、たとえば森ビルの森さんに先日ある会合で会ってお話を聞いたら、溜池と六本木に間の「アークヒルズ」をつくるのに 20 年かかったそうです。地上げ屋を使わずに、地元と話し合って「こういう街づくりをしたい」と理想を話し合ってきたからです。

「六本木ヒルズ」は 17 年かかったそうです。一人一人攻め落として、「こういう街ができます。その代わりその中でお宅はこういう権利が確保できます」という話し合いをして、そういう状態にもっていきました。

中国はそうではない。一気に取っ払ってしまう。だから早い。

#### 立ち遅れる日本の空港

世界のスピードを見ていないと、日本は本当に立ち遅れます。

たとえば日本の空港はお粗末過ぎます。大型のジェット旅客機は、普通 4000m、最低でも 3500m 以上の滑走路がないと安心して飛び立てないのです。着陸するときは短くてもいい。なぜならヨーロッパから満タンで飛来しても着くころには空になっていますから、短い距離でも着陸できます。しかし飛び立つときは満タンで機体が重いので、長い滑走路が必要です。ところが日本の玄関口であるはずの成田空港ですら 4000m の滑走路は 1 本しかありません。

東京湾の周辺に 3500 万人以上が集中して住んでいます。それでもいま空港が稼働しているのは成田と羽田だけ。残りの埼玉、神奈川、群馬、栃木、茨城、山梨まで入れてもどこにも空港がない。こんな国はほかにはありません。

羽田を拡張すればいいというが、これが非常に厄介です。

先日、羽田空港を海の方から見ようというので見てきました。新しい 2500m 滑走路をつくっていて、すでに 6 割がたできています。今年中に滑走路ができて、その周辺の施設を建てて、来年 10 月には開港する目標で進んでいます。

私は東京湾の奥に空港をつくるという提案をいまも懸命にやっていますが、この前の視察で「この程度ではダメだ」と思いました。

そこで私は「名を捨てて実を取る」ことをいま考えています。「日本新空港」あるいは「日本中央空港」というようにネーミングに変えて、日本を代表する空港をつくってはどうか。「羽田に 1 本付け足すよりは、思い切って新空港をつくった方がずっと利便性があります」という対比にしたら、絶対に話がつくと思って発想の転換をしました。

この発想は技術系の人が出したのですが、いろいろな話を聞いてみると確かにそうで、私もそう思い始めました。

羽田と木場をトンネルで結ぶと木場から 10 分で入れます。自動車を通すと排ガスの問題が起きるので、電車にすれば割合簡単です。さらに新空港をトンネルと電車で結べば簡単にアプローチできて、どこへでもすぐ飛び立てるようになります。

日本の非常にまずいところは、外国を見ていないことです。例えば韓国の仁川（インチョン）空港、上海の浦東（ホトウ）空港などはすごい。浦東空港は上海市内にリニヤモーターカーで結ばれていて、乗ってみたら 8 分で着きました。ドイツの浮上式リニヤモーターカーが導入されています。外国ではすでにそういうことを実践しています。

いま、北京～上海を新幹線で結ぶプロジェクトが進んでいて、これには日本も参画しています。

台湾の新幹線は、本当は日本がすべて取る予定だったのが、フランスが入ってきたためにいろいろな問題が発生しています。フランス人の尻拭いをさせられたり、いくら提案しても通らなかったりで、日本の技術陣は非常に苦労しています。日本の政治・外交の弱さに憤慨しています。

そんな訳で、日本の国際性のなさはどうにもならない。

#### 贅沢になり過ぎた日本

日本はあまりに神経質で、手間ひまかけ過ぎて、贅沢していることに気がついていない。例えばここに工場をつくろうとすると、国交省が出てきて、まず「地震がありますから、ここに杭を打たなければならない」コンクリートはこういう割合で混ぜなければいけない」「鉄骨はこう入れなければいけない」というように規制がものすごい。

いざ工場ができて工員を採用すると「エアコンないの？それじゃ働けない」という。「それじゃ、組合で何とか交渉しましょう」となる。「夜はそんなに遅くまで働きたくない」という。こんな贅沢なことを言っていたら周辺の国に勝てっこありません。

中国の青島（チンタオ）で、時間があつたので家内とデパートへ行ってみました。家内が「これすてき」といって 5 着くらい持ってレジに行ったら 1 万数千円でした。これを東京で買ったらいくらかというと、5 万円以下のものはない。ものによっては 10 万円、ひよっとすると 15 万円もしそうだというのです。

なぜかというと、確かに工場は掘っ立て小屋でも、暑くたって、徹夜したって、安い賃金で働いてくれる人たちがいます。機械だけは立派なものを入れている。デザイナーはフランスやイタリアから呼んでくる。ヨーロッパのデザインをそういう工場で作れば、安くてもいいものがどんどん出てくるに決まっています。そういうのが隣国にあることを日本は全然見ていない。

日本製品は、確かに品質は良い。しかし、リッチな人が買ってくれれば良いという商品をつくっています。市場対応として見ると大問題を抱えているのです。だから竹中平蔵さ

んが言う「グローバリゼーションの波に乗れなかった、それが見えなかった人がいま悪くなっている」のであって、構造改革をしたからではありません。

「構造改革」はやり過ぎで、あれはインチキだと私は思っています。要するに株主の利益を主体とした「株主自由主義」です。それではいけないのです。「公益」を大事にした株式会社、つまり「わが社はこういうことで日本の国のために貢献する」というふうにしていかないとダメだと思います。

## 日本再生の芽はある

日本人の知恵は素晴らしい

いま日本はありとあらゆるところで行き詰まり状態です。だから今ごろになって私の「頭の体操」がまた見直されています。ああいう“素っ頓狂”な考え方をやっていかなければいけないのではないかなというようになってきました。

最近、「昔の日本はよかった」という意見が出始めています。「日本もいいものをたくさん持っている」という認識が少しずつ広がってきています。「江戸仕草」の講演会とかシンポジウムが、あちこちで少しずつ行なわれるようになりました。このあたりでうまく立ち直れば、日本はまだいけるように思います。

確かに日本の中小・零細といわれている企業のなかには、素晴らしい知恵をもった会社がたくさんあります。例えば三重県で軍手をつくっていた会社が、一本の糸ですべてを編み上げるといいう仕組みの特許をもっています。その社長があるとき「これを人間のボディと考えて、一本の糸で編んでいけば、ピッタリ合ったセーターができる」と考えました。

布をボディに巻きつけようとすると、部品に切って、その人に合わせてつくっていくしかない。ところが一本の糸でできるセーターは継ぎ目がない。そこに目をつけた外国の有名ブランドが三重県に飛んできて、「ぜひ、うちの製品をつくってくれ」と言うのです。コンピューターで制御すると、どこにどういう模様を入れるということまでできるらしい。小さな町工場が一躍、世界的企業に急成長しました。

そういう話を私は懸命にテレビで紹介しています。「日本人の知恵にはすばらしいものがあります」と言っています。

「メイド・イン・ジャパン」は憧れの的

先日カンボジアに行ったら、みなホンダのオートバイを買いたいという。ところが高く買えないから、現地で生産している5万～7万円のオートバイに乗っている。これが怪しいのです。ひどいのはひと月も乗っているとあちこち壊れてくる。

ベトナムでのホンダのブランド力はものすごい。ベトナムも中産階級化しているから、これからどうなるか興味深く見ていきたいと思っています。

トヨタがハイブリッドの「プリウス」が売れて、こんど3代目を売り出します。ホンダ

も「インサイト」を、200万円を切って189万円という値段で売り出しました。アメリカにも出すようですが、これを新興市場に持っていったらおもしろいと思っています。

中国の湾岸地方は上海に見るようにすごい発展です。遅れていたのが内陸部でした。いま中国はそこに猛烈な投資を行なっています。内陸部に鉄道・道路の交通網を敷けば、上海と直結してくる。そういう投資を始めています。

日本人も西安あたりにみな一斉に出ていっています。どれくらいの価格なら売れるか調べて、「これ以下の値段で、今までの機能を落とすな」と社長が言ってやっています。彼らの売りは「メイド・イン・ジャパン」です。「純粋な日本製ですよ」これがいい。

最近、銀座へ行くと中国語や韓国語がよく聞かれます。銀座のデパートにたくさん来ています。この人たちは資生堂の化粧品を買って行く。なぜ資生堂かというと、中国で売られている資生堂はどれも怪しい。だからここへ来れば“本物”が買えるというので、わざわざそれを買って帰る。いまや「メイド・イン・ジャパン」は本当に世界中で信頼されています。

その「メイド・イン・ジャパン」も、いまは価格競争になっています。品質や性能を落とさずに価格でどこまで迫れるか。それができればマーケットはいくらでもあります。日本の生きる道はそこにあると私は思っています。

千葉は日本のニースかモナコに

私は千葉県知事が沼田さんのころに「なぜ千葉県はこれだけの海岸線を持ちながら、ニースやモナコ、あるいはハワイのような街ができないのか。その海岸線を守りながら、いくらかでも客を誘致する方法はあるはずだ」と申し上げたことがあります。

オーストラリアなど、海岸線の使い方が見事なものです。別荘から降りて行くとヨットで遊べるというのどかな風景があって、ちょっと隠れたところにゆくと軍港がある。また商業の船が着くところはそこは別なところにある。まず、見た目がきれいです。そういう風につくっていかなければ誰も来てくれません。

スイスがすごいと思うのは、教育から徹底していることです。「スイスになぜ世界から人が訪れてくるか」というと、スイスの山が美しいから、スイスの自然がきれいだからです。だから絶対にタバコの吸殻を落としてはいけません。見つけたら私に教えてください」というように教育しています。ツェルマットの街中を歩いても、ゴミはまったく落ちていません。ガソリン自動車は禁止、走っているのは電気自動車と馬車だけです。

登山電車やケーブルカーをつくる時も、自然といかに調和させるかを真剣に考えていっています。「柱を立てるのは無様だ」というので柱がない。よくあれだけの長距離を柱もなしでつくったものだと感心させられます。

日本はそういうことにあまりにも無頓着です。景観のいいところに平気で高圧線を引いてしまう。そんなところに観光客が来ますか。

## 次世代に向けて幼児教育

千葉大付属小学校の校長に

私は教育界に何かやらざるを得ない時期が恐らく来るだろうということを、学生時代から感じていました。教育心理学はあまり好きではなかったけれど、何かで役に立つと思って一応教員免許をとっておきました。1級の教員免許を持っていないと校長にはなれません。それが災いして、千葉大で教授をしていたころ、突然「今日は小学校長の選挙いたします」というので、投票した結果、私が選ばれてしまいました。私はあわてて「いや、その職はとてつとまりません」と言ったのですが、「根拠薄弱だ」と教授会で言われて、昭和53年(1978)、千葉大付属の小学校長になり、5年間やりました。

井深さんと「幼児開発協会」を設立

平成9(1997)年、ソニーの創設者の井深大さんと「幼児開発協会」という財団法人をつくって、私が理事長をつとめることになりました。幼児期からまずは挨拶がきちっとできるようにと考えて、基本的なマナー運動をやってきました。「子育てアイウエオ」のような漫画の小冊子をつくり、子育ての話をあちこちでしたり、いろいろやってきました。

都知事の委嘱を受けて「心の東京革命」会長に

平成14(2002)年、石原慎太郎東京都知事の委嘱を受けて、私は「心の東京革命推進協議会」という青少年育成のための協議会をつくって、その会長を8年間やりました。例えば挨拶くらいできる子供を育てたい、年配者を尊敬する子供を育てたいというような基本的なことです。文科省がさっぱりそこに手をつけないので、石原都知事がしびれきらせて「何とか建て直して欲しい」というので、8年間やりました。

始めるときには私は「全都庁あげての運動でないできませんよ」と申しあげましたら、都知事は副知事を頭に、各部局の局長が入るような会をつくってくれました。

ところが教育長がどういうわけか入ってこない。不審に思って「なぜ教育長は入らないのですか？」と聞いてみたら、「教育長は副知事と同格なので、副知事がトップになっていればその下には入れない」というのです。

では仕方がない、教育委員会を動かすにはどうしたらいいかを考えました。すると市区町村の判断になるというのです。市区町村長が「私は石原知事をあまり好きではないので……」と言ったら、その下の委員会は動きません。

それなら私は作戦を変えて、小さな区でいいからモデル地区をつくって、そこから我々の思っている理想の施策をやっていけばいい、そうすれば少しずつ子供も変わっていくのではないかと考えました。ところが候補地選びがなかなか進まないのです。

「大江戸舞い祭り」

そこで私が応援していた「大江戸舞い祭り」というのをふと思い出しました。

これは、あるコンビニ店長が「東京を何とかしなければいけない。それには日本人は祭りが好きだから、子供のうちから祭りを経験させよう」と考え、古賀政男さんのところへ行って「東京ラプソディ」の花咲き花散る宵は、銀座の柳の下であの曲をいただいて編曲して、それにダンスをつけました。それを都内に流行らせていこうと古賀先生の了解も得て、少し盛り上がりが出てきたところで、私がそれを見つけました。「よし、私が応援する」と、それで毎年9月に都庁の前に3000人の子供たちを集めて踊ることにしました。見物人もたくさんくるようになりました。

あるときあいにくの嵐になりました。それでも子供たちは雨の中で踊りきって、挨拶など礼儀をしつけられていましたので、後片付けもきちんとして挨拶をして帰りました。するとそれを見ていた警察の方々が驚いて「これはすごい。これからはもっと広いスペースを開放しますから自由に使ってください」と言ってくれました。

その日はそれで解散しましたが、後日、「あんな感動的な体験は自分の人生の中で恐らく初めてだろう」というような手紙をたくさんいただきました。

以後は、都庁前から広く回るようにして、最後に都庁の都民広場に入って、そこで審査員が点数をつけて、メダルを渡すということを長いことやってきました。その後、このお祭りが都内各地に相当広く行き渡りました。

これも都知事の発案で「子供たちが挨拶くらいはできるように」と、「東京あいさつフェスティバル」を千駄ヶ谷の東京体育館でやることにしました。

そのとき都の職員のやり方を見ていたら「あそこは何人入る?」「千何百人入る」と簡単にいうのです。私はマジックで舞台に立ったこともあるので千人集めるというのは相当な数であることを知っていました。「どうやって集めるか」「どうやって飽きさせないようにするか」を考えると、容易ではないとわかっていました。

都の職員は私に「何時に来てください」というから行ってみたら、なんのことはない業者に丸投げで、企画書を出させてその中から一つ選ぶということをしていたのです。「そんなのはダメだ。もっと趣旨を理解して、それで組み立てていかないと成功しない。私がやるからにはこういうことをやりたい」といろいろ提案をしました。

例えば、世界中からいろいろな民族衣装の人たちを集めて、その人たちが自分たちの言葉で挨拶を交わす。それを見ていてどこの国かを当てさせるというゲームを企画しました。

石原都知事は現場には来られませんでした。コメントを映像にしてスクリーンに映し、「世界中の人たちはみな挨拶をするのだよ。挨拶というのはとても大事なことなのだよ」という話をしてくれました。そのあとで私が趣旨説明をしました。

私はこの運動のために歌をつくりました。なかなか進まないのが「挨拶は魔法の力」という歌詞をつくって、作曲は私の妻のピアノの先生にお願いしました。これがなかなかいい出来栄で、みなが歌ってくれました。

「挨拶キャラバン隊」

それからさらに、私は「挨拶キャラバン隊」をつくろうと提案しました。お笑い系のタレントや、腹話術の上手な女性がいましたので、その人にもキャラバン隊に加わってもらい、ちょっとした催しをしながら挨拶の大事さを訴えて都内を回るというキャラバン隊です。これがいまでも都内のあちこちの学校と打ち合わせて進められているはずで

す。最初に私が都庁を訪れたとき、ワンフロアのスペースが用意してありました。私はビックリして「冗談じゃない。私はボランティアでやると知事とお約束はしましたが、都の職員と毎日一緒にやるというほど暇ではない」といって、そのスペースを返してしまいました。いま考えれば、あのスペースを借りておけばよかったなと思うけど、そのときはそこまで欲がありませんでした。

要するに、みんなが喜んでくれて、挨拶やマナーの向上が図ればいいというのが私の狙いでしたから、例えば子供たちに挨拶を非常によくさせている空手道場など、NHKにニュースで流してもらうこともしました。「よろしくお願いします」と子供たちが歯切れよく挨拶をする。そこで「挨拶ソング」を歌うという、その場面は流れました。狙い通りで、そういうことをやればテレビも入ってくる。これは割合成功して続けています。

しかし私も年をとってきたので、先日、「こういうこともそろそろ私がやるより若い人たちにやってもらった方がいい」と考えて、石原都知事にお話しました。都知事に「先生、おいくつになられましたか」と聞かれましたので、「82才ですよ」というと、「そうですか。それでは引き留めるのはちょっと難しいですな」というので、何とか了解を得て辞めさせてもらいました。いまはもう83才です。

ソニーの井深さんと「東京未来大学」

ソニーの井深さんとは幼児教育の関連で「これからは幼稚園と保育園の保育士をきっちり育てなければいけない」というので、平成19年(2007)、足立区に「東京未来大学」というのを創立し、私が学長になりました。「東京未来大学」は幼児教育、特に子供心理学に特化した小さな大学で、1学年200人、完成年度までいっても4学年で800人にしかなりません。立地条件は非常によい。

最近は少子化の影響で学校を統合すると廃校ができます。その空いた中学校の校舎を自治体が「50年間安く貸すから、そこでできたら文化的ことをしてくれたらありがたい」というので、我々が手当をして大学をつくることにして、私とその学長に就任しました。

そしたら、どうも教授の数が足りないというので私も講義を持つことになりました。それを読売新聞がかぎつけて、「先生も講義をおやりになるそうですが、今の若者は大丈夫ですかね?」というから、「いくらなんでも授業中に学生を寝かせるようなことはしませんよ」と言って、それが夕刊の記事になりました。ところがいざ教壇に立つと、私が話すようなことは若い人の感性に合わないのです。半分はよく聞いているが、あとの半分はおしゃべりしている。考えてみればそれも無理のないことです。たとえばいま、祖父、祖母、父、

母、子供までと一緒に暮らしているような家庭はなく、一緒に歌える歌もありません。

私は自分に関係のない情報は聞かないという“情報カット”を徹底してやってきましたが、考えてみたら若い人たちも同じことをやっています。一昨年だったか小島よしおの「そんなの関係ない」というのが流行語大賞になりました。若い人たちも“情報カット”しているのです。「愛国心？そんなの関係ない」と言っているのです。

結局、私はもっと若い先生方にやってもらった方がいいと思って「オムニバス形式」という方法を考えて、私は聞いていて最後にコメントするといやり方で凌いできました。やってみて「なるほど、時代はここまで変わったか」と実感しています。

私は学生に媚びた講義をするつもりはありませんので、結局、引くよりしょうがないと思いました。

しかし、まだ名誉学長ということでなかなか引かせてくれません。区長や教育長と約束した手前、「ちょっと違っていたので辞めます」とは言えません。それでいまま名誉学長ということで、公的な講演会などはやっています。

#### バイオリンの「鈴木メソッド」を応援

昨日（平成 21 年 3 月 31 日）全国から 3000 人以上集まって、バイオリンの「鈴木メソッド」の発表会があり、私も聞きに行きました。昔は東京体育館でやっていましたが、今は武道館が満杯になるほど盛況です。毎年、皇太子（今の天皇）など、必ず宮様をご覧になられますが、昨日は高円宮妃殿下がご臨席されました。

徳川公爵は「鈴木メソッド」のスポンサーでもありました。開発者の鈴木鎮一先生がドイツに行ってバイオリンを勉強してくるときに、徳川公爵はその費用を負担したのです。

鈴木先生が帰ってこられたときに、いまではバイオリニストとして有名な江藤俊哉氏が 4 歳のとき、もう一人その一つ下の豊田浩司氏の二人が「バイオリンを教えてくれ」と言ってきました。

当時、「バイオリンは難しいので小さい子供に教えられる楽器ではない」といわれていましたが、「それはおかしい」と鈴木先生は考えられました。「我々が母国語を身に着けたのは、生まれた時からやっているからで何の苦勞もしていない。ところが英語やドイツ語を習うにはみな苦勞をしている。その違いは幼児教育にある」と鈴木先生は考えました。

私が最初に鈴木メソッドの子供たちの、バイオリンの演奏会を聞いた時は本当には泣きました。感動して鈴木先生に「ぜひひとつスケジュールを空けてください」と言って、そのあとすぐ先生のおられる松本に飛んで行きました。

それから井深さんと二人で、「これは絶対に応援しよう」ということで、「鈴木メソッド」の応援を長年やっています。

昨年、東京都の「名誉都民」に

昨年、私は「名誉都民」に顕彰されました。おそらく私が幼児教育やその環境づくりにいろいろやってきたことが評価されたのだと思います。

昭和 27 年に「名誉都民条例」が公布され、昭和 28 年から顕彰が始まり、その第 1 号は尾崎号堂、第 2 号が牧野富太郎先生ですから、錚々たる面々です。

平成 18 年までに 81 名、平成 20 年に加瀬三郎、多湖輝、松平康隆の 3 名が加わって、84 名になりました。私は 83 番目です。

東京都庁本庁舎の 5 階に、写真が飾られています。都庁がつぶれない限り、永久に飾られていることでしょう。名誉なことです。

いろいろ考えると問題山積で、私はいまの若者の変貌して行く姿を見ていて情けなくなって、こんな国にいられない、外国へ行こうかと思ったこともありました。アメリカへ行けば、ニュースもろくに伝わってこない。そんなところなら老後を安楽に暮らせるなと思いました。

しかし、やっぱり日本人なのだから日本にいて、できるだけ何かしなければいけないと思ひ直して、先も長くないのにいろんなことを考えてやっています。

「どうしたらこの国をよくすることができるか」という本を、私はこれから具体的に書こうと思っています。

## 生い立ち

### スマトラ生まれ

私はインドネシアのスマトラ島で4人兄弟の3男として生まれました。メダンという北の方でした。大正15年(1926)2月25日、早生れでした。

大正15年は12月25日に年号が変わって「昭和」になりましたので、昭和元年生まれの人はほとんどいません。財界を中心に「昭元会(しょうげんかい)」というのがありますが、昭和元年生まれは一人もいません。みな大正15年生まれです。その前の年は豊田章一郎氏などが入っている大正14年生まれの「丑の会(うしのかい)」。私は寅年ですが、丑年の遅生まれと一緒のクラスでした。

スマトラでは子供一人一人に乳母をつける習慣がありましたから、私も最初はマレー人の乳母に面倒をみてもらいました。乳母が歌ってくれた子守唄をいまだに覚えています。

私の父は三井物産の商社マンでシンガポールの支店長をやっていて、そのときに台湾へ移動を命じられました。しかし父は「この地で事業をしたい」との決意で退社して、スマトラ島でゴムを生産する工場を始めました。しかし間もなく「昭和大恐慌」(1929年・昭和4年)にさしかかり、会社経営が難しくなって日本へ帰ってきました。

### 帰国後、目白の徳川邸に

帰国するときに、名古屋の「虎狩りの殿様」として知られた徳川義親さんという侯爵様が「スマトラでの経験を参考にしたい」と、父を顧問として迎えてくれました。南方で事業をやりたいというので、父の経験を聞きたかったのです。その侯爵様が東京・目白に広いお屋敷を持っていて、そこには顧問をやっているような人たちが何人もいて、その社宅のようなものが屋敷の中に建っていました。我が家もその1軒をいただいて、そこで過ごしていました。

私は当時「高田第5小学校」という目白の小学校に通いました。

徳川邸は緑がうっそうと茂った広大なお屋敷でしたので、私は学校から帰るとカバンを放り出して、セミやトンボを追いかけたものでした。

とにかく、子供のときから破天荒な人間でしたから、徳川邸で今も歴史に残る大事件を起こしたことがあります。

徳川邸のお庭にはお地蔵さんがありました。子供野球の前の日に「明日はどうしても天気にしてくれ」と、そのお地蔵さんにみんなでお願いしたのですが、当日は雨が降ってしまいました。

その翌日、「このお地蔵さんがけしからん」といって、私は石でその地蔵の鼻を欠いてしまいました。それを見た公爵様は「あっ、大変なことをしてくれたな」とおっしゃいましたが、すぐに「こんなところに置いておいたのがいけなかったのだ」と立ち去られました。子供心にも「大変なことをしたようだ」と感じて、夕方まで待って家に帰りました。する

と父が物差しを持って行ったり来たりしているのです。しばらくしてから恐る恐る入ると、案の定、さんざんに叩かれました。

このお地蔵さんは名古屋の徳川家に「無傷の地蔵」として伝わる大変貴重なものでした。その鼻を欠いてしまったのですから、これは相当な大事件でした。

そのほかいろいろいたずらをして、徳川公爵にもずいぶん迷惑をかけました。

## マジシャンへの道

徳川邸でよかったのは、徳川義親さんがマジックを楽しんでおられて、私たち子供にも見せてくれたことです。

殿様のことですから、阿部徳蔵さんというプロのマジシャンを呼んで習っておられて、あるとき阿部先生に「せっかく習うのなら、この屋敷に子供たちがたくさんいるから、ぜひ子供たちにも見せてやってくれないか」とおっしゃって、私どもはその先生が来るたびにお屋敷に招かれてマジックを見せていただきました。それが私のマジックの始まりです。

日曜日に私は朝早くからでかけて、お昼も食べずに一生懸命に眺めていました。日が暮れる頃になると、「熱心だねえ、まだタネがわからないかい」と言って、「今日は特別におじさんが坊やにあげるから、持って帰ってよく研究するのだよ」といってその手品の道具をくれました。それが私の小学校1～2年の頃でした。

それから本格的なマジックの本を読んだり、自分でもやるようになって、大学院のときに周りの大学にも声をかけてみたら結構マジシャンの同好会があって、「『東京アマチュアマジシャンクラブの青年部』をつくろう」となりました。するとその親の会の偉い人たちがマジックを教えてくれたり、いろいろ世話をしてくれました。

私は後に「東京アマチュアマジシャンズクラブ」の会長をすることになりますが、徳川義親さんも同じ会の会員だったことが後でわかりました。

私が「東京アマチュアマジシャンクラブ」の親の会のメンバーになったのは、助教授になってからでした。しかし当時は忙しく全国を飛び回っていたので、ほとんど出席しませんでした。

あるとき、今から数年前、「『東京アマチュアマジシャンクラブ』の70周年をやるから、あなた会長をやってくれないか」と頼まれました。最初は「私はマジックもあまりうまくないし、しばらくやっていないから」と断っていたのですが、「今までさぼっていたのだから、それくらい奉公しろ」と言われたのでやらざるを得なくなりました。

会長を引き受けた以上は私も舞台に立たざるを得ない。「助走期間が必要だ」と1年前から始めました。普段あまり練習していないので、できるのは20種目くらいです。女の子を浮かせたり、そんなようなものを私なりに味付けをしてやりました。

## 四中時代

とにかく四中はすごい学校でした。あれだけの力量の先生をそろえて、あれだけの力をつけてくれた学校はほかにはありません。校長の深井鑑一郎先生が優秀な先生を懸命に集めたのだと思います。

四中はかなり厳しかった。プレッシャーをかけるやり方でした。いま考えれば軍が台頭してくる時期だったからやれたのだと思います。

当時の四中には卒業後、上級の名門校に入った人たちが、秋になると現役を「激励」と称していじめにやってきたものでした。当時は4年から上級の学校に行けたので、私は理科に転向するために1年浪人していると、同級生が先輩として来るわけです。大手を振ってやってくるのは兵隊さんたちです。特に海軍はカッコよかった。一高生も来ました。

### 厳しかったしつけ教育

私は四中にはあまり良い思い出はありません。

学校生活で印象に残っているのは、忘れ物をすることを「遺忘(いぼう)」とって、一学期に「遺忘」を5回すると、一番ビリになる決まりがありました。どんなに頑張っても「操行」が「丙」になる。そうすると一番ビリになる。

「遅刻」もダメでした。時間が来ると校門が閉められる。私なんか遅刻の常習犯でした。裏に行くと「浜田」という文房具屋があって、その横にゴミ箱が一つ置いてある。そこに乗ると中に入れる。そのうちに先生も気が付いて、怪しい奴がいるらしいというので見回りを始めました。コツコツという先生の足音が消えるとみんなで教室に入る。本当にスリルがありました。

入学して1週間も経たないうちに、私はもう校長室の前に立たされました。皆がそのわきを通って行く。普通はしょんぼりうなだれているのに、私は「おう！」と手を振ったりしていました。とにかく最初から「よたもの」でした。いかに先生をからかうかということばかり考えていました。

一番スリルのあったのは、物理の碓井先生という厳しい先生がいましたが、頭の真ん中が禿げていたのです。私は窓際に陣取って、鏡で太陽を反射させて天井に当てます。先生は気付かない。先生がふっと下を向いたすきに頭をすっと照らす。みな笑いたいけど、ばれたら大変だから笑いをこらえている。まあ、そんな悪さをよくやったものでした。

昔は旧制高校で中学・高校を教える教員免許が取れましたので、私はそこで英語と国語の教員免許をとりました。そのお陰で大学院のときにアルバイトで英語の先生として教壇に立つことができました。そのときに「そうだゲーテなんて先生(飯島善三郎)がいたな」と四中の先生を思い出しました。「ゲーテはうるさかったけど、あの先生はできたなあ」としみじみ思いました。私なんかとても教える資格はないのにアルバイトでやるのですから、自分でやってみてはじめて昔の先生方が、格段に力があつたことがわかりました。

## 那須の道場

僕らが一番楽しかったのは、その期間は勉強しなくていい那須の修養道場でした。ちょうど成長期でしたから、一緒に風呂に入ってワーワー騒ぐだけでも楽しみでした。

那須の道場にはシーズンごとに1週間くらい行きました。冬は那珂川で冷水浴をさせられ、そのあと上の神社まで駆け上がって祝詞を唱えさせられました。

朝食の後は、牛の世話から豚の世話まで農作業を全部やらされました。

夜は風呂に入ってから座禅を組んで、先生の講和を聞かされました。

いいことも悪いこともあそこでみな覚ええました。だから今でもクラス会になると、まず那須の道場の話になります。

何しろ我々の時代は、あの那須の道場だけが唯一の思い出というくらい授業が厳しかった。だから、あそこへ行くと本当に気が晴れる思いがしました。星を眺めて、高峰三枝子の「湖畔の宿」を一緒に歌ったり、悪いこともだいたいあそこで覚ええました。

## 四中でのいたずら

僕らがやった中で一番ひどいことをしたのは、銃器庫を壊して学校破壊の第一号をやったことです。

我々に思想性はありませんでしたが、軍部が台頭してきてだんだん厳しくなっていくので、私にはそれがうっとうしくてなりませんでした。そこで「一発やるか」というので、すぐに20人くらい集まって、バールで頑丈なカギのかかった銃器庫をこじ開けて、鉄砲を取り出してそれに剣を付けて、学校破壊をやりました。実はこの話は今日まであまり知られていません。それには訳があったのです。

この事件は一人つかまったら芋づる式に全部名前が出て、瞬く間にばれてしまいました。私は母親に「今までも謹慎や停学など迷惑をかけてきましたが、今度はダメです。いよいよ退学させられます」と母にいうと、明治の親というのはすごいもので、パッと正座して「あなたも正座しなさい」と言って、私の顔をじっと見るのです。「お前にはお前なりの考えがあってやったことだろうから何も言わない。しかしお前にはまだ将来がある。これからでも受け入れてくれる学校があるならお父さんに何とかお願いして行かせてやろう。もしそれができなかつたら、お前は自分で自分の責任を取って、丁稚奉公でも何でもやって生きてゆく道を考えなさい」とバッチリ言われました。私は「ああ、明治の親はすごいな」と思いました。

それから翌日、覚悟して校長室に入って行きました。

すると、何と校長が泣き出すではありませんか。「残念だ。僕は君たちを信用していたのに」と言うのです。男の号泣というものを私はその時初めて見ました。白澤さんという校長でした。「この時局に、いかにことが重大であるか君らにも判断できるだろう。反省したまえ」と、それだけで何のお咎めもなく釈放されました。表へ出て「なんで釈放なんだ？退校にならないのかね」と不思議に思って、よく考えたらわかりました。あまりに事が重

大過ぎたのです。おそらく徹夜で職員会議をやっていたのでしょう。あのご時世に都の学校の男子生徒が銃器庫をぶち破って、菊の御紋章のついた鉄砲を持って学校で暴れ回ったなんて、後で考えたらもしあの事件が新聞沙汰にでもなったら校長の首どころではない、都の教育長の首が飛んで、文部大臣が進退伺いを出すくらいの大事件だったのではないのでしょうか。事が重大過ぎるので、「ともかく伏せよう」と決めてくれたのです。それで私たちは生き延びたようなものです。4年生のときだから昭和17年だと思います。昭和16年12月には宣戦布告したばかりですから、時局といえはあまりにも重大な時期でした。

昭和18(1943)年、府立四中を卒業しました。いたずらばかりしてきましたが、今考えると四中はすごい学校でした。特に力量のある先生方が揃っていて、我々の成長期に基本的なことを叩きこんでくれたことには今もってありがたいと思っています。

平成 20 年度千葉城北会総会記念講演

## 「中東イスラームの謎を解く」

講師 元駐イラク・エジプト大使 片倉 邦雄氏 (S27 卒)

平成 20 年(2008)11 月 1 日  
船橋グランドホテルにて

### 【講師プロフィール】

片倉 邦雄 (かたくらくにお) 氏  
昭和 8 年(1933)10 月 22 日生れ  
昭和 27 年(1952)都立戸山高校卒  
昭和 35 年(1960)東京大学法学部卒  
(在学中、交換学生として米国ダートマス大学に  
1 年留学)  
昭和 35 年(1960)外務省入省

アラビア語研修。

サウジ、イラン、国連代表部など勤務の後、  
アラブ首長国連邦(1986-88)、イラク(90-  
91)ならびにエジプト(94-97)駐在大使を  
歴任。

第 2 回東京アフリカ開発会議日本政府代表  
(1998)を最後に退官。

1999-2004 年 大東文化大学国際関係学部教授

現在 21 世紀イスラーム研究会を主宰。日本エネルギー  
経済研究所理事等

主な著書:「人質とともに生きて」1994 年 毎日新聞社

「トン考」- ヒトとブタをめぐる愛憎の文化史 2001 年 アートダイジェスト

「アラビスト外交官の中東回想録」 2005 年 明石書店



< 片倉邦雄氏講演 >

## 「中東イスラームの謎を解く」

本日は中東イスラームというわけのわからない地域のお話をする事になっておりまして恐縮です。できるだけお気軽にお聞きいただきたいと願っております。

昨今、アメリカのサブプライムローンに端を発した金融危機で株は大きく下がる、通貨は大きく変動するという情勢ですから、中東イスラームなどすっ飛んだのではないかとお考えの方もいらっしゃるかも知れません。しかし私は「いやいや、そうではありませんよ」ということを、まず申し上げます。この中東イスラームというのはこれから、特にいま「イスラーム金融」に関心が高まっておりますので、おろそかにはできない問題です。何とかあそこに貯まっている「ペトロ・ダラー」をこっちに引っ張ってこようと金融関係企業、国際協力銀行などが大変な関心を持ってサウジアラビア、ドバイ、アブダビに日参しているような状況です。

では相手は一体どういう人たちかという、これがなかなかつかめないというので、皆さん苦労しておられます。主としてイスラーム国であるということではありますが、掘り下げれば掘り下げるほど「イスラームとは一体何か」、イスラーム社会、宗教としてのイスラームなど、なかなか理解することが難しいのであります。しかしその辺のところを把握していないと、表面的な話だけではすれ違ってしまいます。ですから、これから私が申し上げるようなイスラームについての基本的なことを理解しておく必要があると思います。そうしないと、とんでもない間違いを犯すことにもなりかねませんので、今日はその周辺のお話をさせていただきます。

### 【講演内容の概要】

本論に入る前に、「イスラーム」というものの全体の理解を得るために、おおよその筋立てをお話します。

私は中東と長いこと付き合ってきた経験上、中東を見る場合に重要な三つの要素があると思っています。

< 中東の三要素 >

- (1) 紛争
- (2) エネルギー
- (3) イスラーム

この三つの要素をからめて考えなければ本質がわからない。言ってみれば「XYZを変数とした多元方程式」を解くようなことが必要です。

「イスラーム」というのは、普通は日常の「サラーム」という“平和”“平穩”を中心としているところが本質をなしているわけですが、しかし、「裏側には“非日常”の世界もあ

る」ということも知っておかなければなりません。アル・カーイダとか、オサマ・ビン・ラーディンなどテレビや新聞紙上をにぎわしているような非常に危ない要素もあることも事実です。

「孫子の兵法」によれば、「風林火山」のほかにも、実はあとふたつの面があって、“闇の世界”と“イカズチの世界”といいますか、“非日常の世界”が付いています。同様にイスラームにも突然変異的な、爆発的なマグマを再生産するような闇の世界があるということもわかっていただきたいと思います。

「イスラーム」は宗教として成長株

まず、「イスラミックパワー」といわれるものは、将来、縮小していくのかどうかについてですが、私はそんなことにはならないと見ています。宗教というものは現代社会では、我々仏教徒が葬式のときにお世話になるだけで、21世紀、22世紀になればだんだん縮まっていくのではないかという気がいたします。しかし「イスラーム」は将来拡大していく、宗教としては“成長株”ではないか。

11月4日、あと3日後にアメリカの大統領選挙が行われます。大方の予想では「オバマ」が選ばれるのではないかとわれています。この人の名前が実は「バラク・フセイン・オバマ」と言いまして、「フセイン」というのが間に入っています。これはおじいさんの名前です。彼がケニアで生まれて、おじいさんはイスラーム教徒でした。ですから、ミドルネームとしておじいさんの名前が入っています。「バラク」というのは、エジプトの大統領も「モバラク」ですが、「バラカ」というのは「恵み」というアラビア語の意味がありまして、「バラク」もアラビア語オリジンであります。

現在、アメリカでは“アラビア語オリジン”だから胡散臭いぞという反応はそれほど出ておりませんが、前世紀の終りころから“アフロアメリカン”といいますか、端的に言えば“ブラック”にイスラーム教徒が浸透してきて、今世紀になってからその傾向が一層強まってきております。

恐らく大統領候補の「オバマ」は現在キリスト教徒に改宗していると思われませんが、文化的背景をいえばイスラーム教、その後、彼の親が離婚するなど複雑な家庭環境にあって、インドネシアに行って教育を受けますが、この国はもう巨大なイスラーム国ですから、血の流れあるいは皮膚感覚には、イスラームというものを充分理解できる文化的素地が現在もあるのではないかと思います。

オバマ氏が政権に就いた場合に、外交関係で果たして彼が“親イスラーム”であるか、“親イラン”であるか、そこまでいくかどうかはわかりません。しかし少なくともブッシュ Jr. の時代よりは恐らくイスラーム理解にはより深いものが出てくるのではないかと、“wait and see”というべきものだと思います。

## 教祖「モハンマド」について

次に私がぜひ申し上げてみたいのは、これが本日のメインテーマになるかと思いますが、イスラーム教を始めた「モハンマド」という人についてです。この人の人間像は果たしてどんな人間だったのかということ、私の理解する限りをお話してみたいと思います。

一言でいえばイスラームは「熟年の宗教」と言えると思います。なぜなら、キリストにしても、その前のユダヤ教の開祖モーゼにしても、ブッダにしても、教祖は比較的若い時に啓示を受けて信仰宗教として発想しましたが、モハンマドは40代にして初めて「神・アラ」の啓示を受けたということです。また、よく誤解されるのが「これは遊牧民の宗教、砂漠の宗教ではないか」ということです。私も以前はそう思っていました。しかし先人の書かれたものなどよく読み、現地で聞いてみますとそうではありません。モハンマドは元々「商人」です。「商売」ということが頭にあって、それを踏まえて出てきた宗教がイスラームです。砂漠の商売ですから、いわば「キャラバン・アンド・カンパニー」という商社でいろいろな商売をしていました。その中には伽羅・乳香などの「お香」が重要な商品でした。

本日、私が持ってまいりましたのは、サウジアラビアで手に入れた乳香です。これに火を点けますので、皆さんにも嗅いでいただきます。キャラはよくありますが、ニューコウはめずらしい。モハメッドが「キャラバン・アンド・カンパニー」で働いていたころには、こういう商売をしていたということをお嗅いでいただきたいと思います。

## 日本との歴史的なつながり

次に、イスラームと日本のつながりはどうだったかということです。皆さんは、あるいは「つながりはない」と考えておられると思いますが、実はつながりがあるのです。正倉院の御物をはじめ、大東亜戦争・太平洋戦争のころには、当時は「回教」といっておりましたが、現在のインドネシアを含む「南方」が勢力圏に入ることを見越し、広報・宣撫工作との関連において一挙に関心が高まりました。「大日本回教連盟」が組織され、「回教工作」が軍官民共同で昭和14～15年をピークに鼓吹されました。

戦後では第一次オイルショックを機会に「アブラ(油)かアラブか」といわれたように、アラブへの関心が高まりました。つい最近、日本経済新聞では「身近なイスラーム」という記事を2008年10月8日から21日まで4回にわたって連載しました。これは「隣人にもモスリムがいるよ」ということを書いていました。要するに「モスリムすなわちイスラーム教徒と付き合うにはどういうことを大切にしたらいいか」という話です。

もちろん、イスラームの中には突然変異的に飛びあがった「テロリスト」が現れたりしていますが、こういうこともイスラーム教とまったく無縁ではない。これをどう考えたらいいか。警察や治安当局にも私は時々講義に行っています。

最後の「イスラーム金融」という問題について、私は若い弁護士たちと「イスラーム法＝シャリーア」特に「ビジネス法」の「シャリーア研究会」をつくって、そこで利子の問

題や「イスラーム適格性(シャリーア・コンプライアンス)」を話し合っています。たとえば、ある金融商品が「イスラーム法」に照らして適格であるかどうか、適格でないといスラームの人は買ってくれません。そこで日本の銀行は自分のところの金融商品が適格である、「シャリーア」に対して問題ないということを懸命に売り込んでいます。こういうところが非常に重要になっております。

以上のようなことをご理解いただいたところで、それでは本題に入ります。

## 【本論】

### 「紛争」「エネルギー」「イスラーム」

第一は「紛争」「エネルギー」「イスラーム」という三題話のようなことですが、ご存じのように1973年に第1次石油ショックがありました。このとき中東の国々は石油をパレスチナという国際紛争を解決するために使おうと考えました。何をしたかという「プロ・アラブ」の国だけに正常な石油の流れを確保する、逆に親イスラエル、あるいはアラブに対してクールな国(日本もその中に含まれる)に対しては毎月5%ずつ供給をカットするということをしました。これは「オイル・パワー」としてのサウジアラビアと、「ミリタリー・パワー」であるエジプトが仕組んだ「石油戦略」の展開でした。

これこそまさに典型的な「紛争」「エネルギー」「イスラーム」がからみあったケースでした。トイレットペーパー騒ぎにまで広がって世界を不安に陥れましたので、皆さんもご記憶のことと思います。

地図(29頁)をご覧くださいとわかりますが、中東の国々は日本から約1万キロ離れています。その国々に日本は第一次オイルショックのときには原油依存度77%、第二次オイルショックのときが76%、現在では90%ですから、ますます中東依存度が高まっていると言えます。サウジアラビア、UAE(アラブ首長国連邦 United Arab Emirates)、イランの順で大きな石油依存度を示しております。

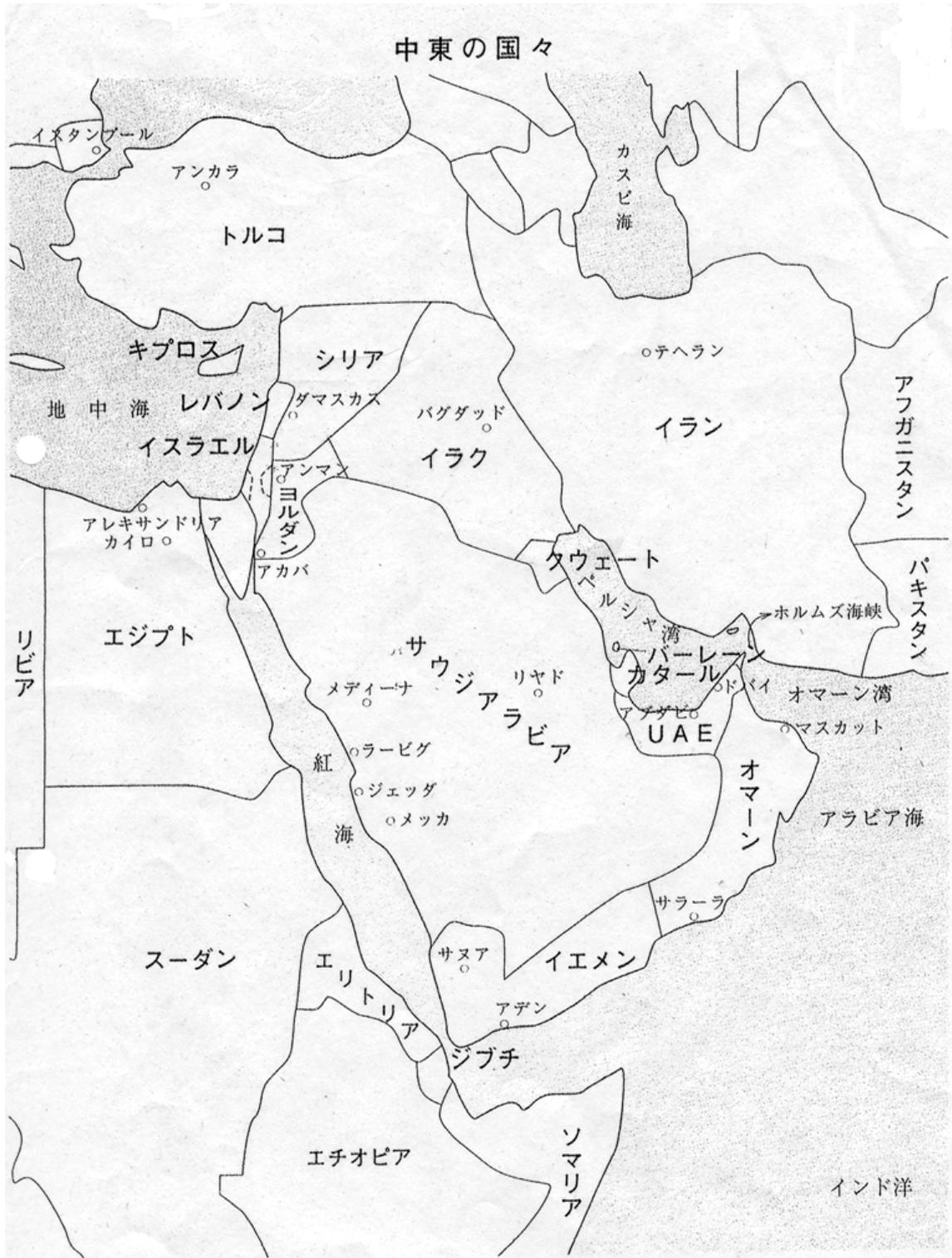
石油の確認埋蔵量でいくと、やはり中東の埋蔵量が大きく、6割を占めています。「ここ掘れワンワン」で掘れば出てくるというのが確認埋蔵量ですが、中東がナンバーワンです。次いで旧ソ連、北米といった順になっています。

天然ガスについても、中東は4割の埋蔵量を示しています。

ついでながら、現在の世界の人口が60億人を越えて70億人に近づいているといわれていますが、そのうちイスラーム人口が5分の1すなわち14億人くらいいると考えられます。しかもこれから先、どんどん増えていくと考えられます。人口ピラミッド(30頁)でいくと、日本は少子高齢化社会ですから、下の方が細く、真ん中から上の方が膨らんでいます。

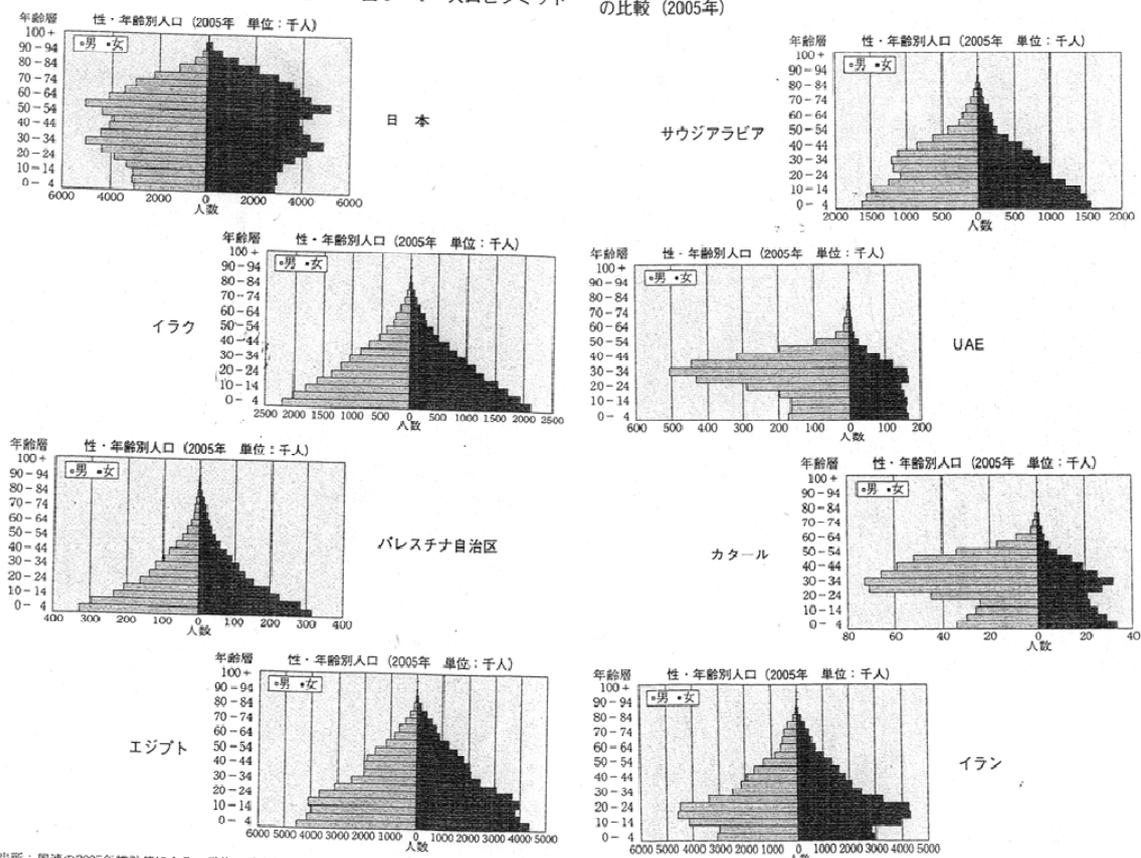
ところが中東はサウジアラビアにしても、イラン、イラクにしても、典型的なピラミッドの形をしており、裾野が広く若年層の人口が非常に大きくなっています。出生率も日本は1.3%といっていますが、サウジアラビアは4%、石油の出ない貧困の極にあるようなパレスチナのカザ地区などは5.6%、イラクも4.8%、UAEは抑えているので2.5%、エ

ジブチも4%を切っていますが、先進国に比べれば旺盛な増加率です。まあ、他にやることがないから、特にパレスチナのガザ地区などはテレビもありませんので、楽しみがないから子供が増えるという結果になるのではないかと思います。



いずれにしても、これだけ若年層がどんどん増え、失業率も非常に高い。世界全体の失業率は13%といわれていますが、中東は北アフリカも含めると25%に達していることは問題をはらんでおります。石油の採れる中東でどうして失業率が25%にもなるのかという疑問が生じますが、これは経済運営が必ずしもうまくいっていない何よりの証拠ではないかと思えます。これを「人口の時限爆弾」などという人もいます。イスラームの中の非日常的な「闇」といいますが、「イカズチ」の部分が、人口の急増という問題、若年層の失業問題とも密接に関わっているのではないかと思います。

図J-1 人口ピラミッドの比較 (2005年)



## イスラームの特徴

### (1) 一神教

次に、イスラームの宗教的特徴を申し上げますと、まず、「一神教」であること、唯一神「アッラー」を信仰する宗教であるということです。

更に大切なことは「コーラン」といわれる啓典、それに預言者です。「預言者」というのは将来を予言することではなく、「アラーの言葉を預かった者」という意味です。英語でいうと「メッセンジャー」などと言われています。

### (2) 六信

「来世」を信じ、「定め」を信じる、つまり「唯一神(アッラー)」「天使」「啓典」「預言者」「来世」「定命」を「六信」というのが信仰の柱であります。

### (3) 五行

「五行」というのは、次の五つのことで、イスラーム教徒は男(ムスリム)、女(ムスリマ)にかかわらず、必ず行わなければならない信仰活動のことです。

#### 「信仰の告白」

その第一は「信仰の告白(シャハーダ)」のことです。よく、歩きながらもブツブツ言っているのがそれです。何を言っているかという「アラーの他に神はなし」「モハンマドはアラーの使徒である」(ラーイラー・イラッラー・モハンマド・ラスール・アッラー)というのがブツブツの内容であり、これを常に口にしています。

たとえばアメリカで、アフロアメリカンの青年がイスラーム教に入信するという場合も、これを口ずさまないといけません。英語ではだめです。アラビア語で言わないといけません。

日本でもイスラーム教入信者は増えています。学卒のインテリ女性でも入信する方がいます。そのときも、このアラビア語で「信仰の告白」をしなければなりません。

#### 「礼拝(サラール)」

次は「礼拝」です。「サラール」といわれる、メッカの方向、これを「キブラ」といいますが、キブラに向かっての「礼拝」です。これを一日5回しなければなりません。実際は日が昇る時から日が沈むまで、一日3回くらいにはしよる信徒もかなりいます。

#### 「喜捨(ザカート)」

3番目は「ザカート」といって、「喜捨」のことです。実は世界では所得税のない国がたくさんありまして、イスラーム教の国もそうです。「ザカート」は自己査定で、自分の収入の2.5%くらいを教会に寄付をします。

#### 「断食(サウム)」

イスラームには「ラマダーン」と言って、断食の月があります。断食のことを「サウム」、

インドネシアでは「ブアサ」と言います。インドネシアに関係のあった方は断食のことを「ブアサ」と覚えておられると思います。

この「サウム」というのは、日の出から日没まで、一切飲み食いしないことです。厳格な方は水も飲まないし、自分の唾も飲まない。唾は全部吐き出します。性行為も慎むことになっています。まあ、昼間は誰でも慎んでいるとは思いますが。

「巡礼(ハッジ)」

この「巡礼(ハッジ)」は、必ずやらなければならないということではないのですが、懐が許す限り、また健康が許す限り、サウジアラビアの両聖地、すなわち「メッカ」というモハメッドが布教を始めたところ、そして北へ400キロ離れた「メディーナ」という亡くなられたところに巡礼をします。

これは自前で行かなければいけない、借金をして巡礼をしてはいけない。日本の四国八十八か所の巡礼では、あるいは借金して行った方もあるかもしれませんが、イスラーム教では借金して行ってはいけないことになっております。

以上が「五行」ですが、ここで日本との関わりということで少し触れておきたいのが、「仏教とどう違うの?」ということです。「神道」の場合は「八百万の神(やおよろずのかみ)」で一神教とは違いますのでこれは別にしまして、世界的なイスラーム学の大家でもある慶応大学の井筒俊彦さん(故人)という大先生がおられました。イスラーム社会を研究しております私の妻(片倉もとこ)も井筒先生の弟子みたいなものでしたが、日本のイスラーム学者のやりたいが今でも先生の書かれたものを拳拳服膺(けんけんふくよう・胸中に銘記して忘れずに守ること)しているというのが本当のところですよ。

この井筒先生が言われたことには「イスラーム教と日本の仏教は似ている。ただ一点だけ違うのは、仏教でいう『カルマ』という因果応報の『業』という考え方だけだ。過去においてこういうことをしたから現在がこうだとか、現在、罪を犯せば来世にこれが出てくる、人間の姿では戻れないというような『業』という考え方はイスラームにはない」とおっしゃっています。

それ以外では、たとえば仏教の「お布施」はイスラームの「喜捨(ザカート)」にそっくりです。お祈りもいたしますし、断食もあります。告白はどの宗教でもやらなければいけないので共通しています。

ですから、仏教との唯一の相違点は「因果応報の業」だと私どもは理解しております。

## モハンマドとはどんな人?

アラビア語には母音がありませんから、一般に、みな子音でできています。

英語で書きますと「K T B」と書いて、これを「キャタバ」と読むか、「クティバ」と読むか、「キティビ」と読むかは文脈によって全部変わってきます。そこがアラビア語の非常

に難しいところです。

もう一つついでに申し上げますと、アラビア文字は28文字ありますが、難しいのはアラビア語には「ダード」という字が3つあります。「ドーブ」という軽い音、それから英語でいう the のように舌を入れて「ザード」という音、それから喉の奥



から出る「ドーブ」という音ですね。この「ダード」をちゃんと発音しなければ、アラビア語を勉強したことにはなりません。

これとよく似たことが、米軍が日本軍のインテリジェンス（諜報部員）が潜り込んでいないかどうかを見分けるために、米軍のなかにも日系二世もおりましたので区別がつかみませんので、「ラバブル・ララバイ」の発音をさせてみてこれができるばアングロサクソンだ、日本のインテリジェンスではないということを見分けたそうです。

これと同じように「ダード」でテストされると、私なんか落ちてしまう。喉の摩擦を必要とする発音が多い言葉ですから。そこがアラビア語を難しくしています。

本論に戻りまして、モハンマドはどういう人間であったかといいますが、まず、彼が生まれたのはAD570年ですから、日本でいえば聖徳太子あるいは推古天皇と大体同年代にあたります。

前述のように、彼は若い頃「キャラバン・アンド・カンパニー」の商社マンでした。乳香という、今の南部イエーメンでとれる樹の脂（ヤニ）ですが、これが金と同等に取引されたというくらい貴重なもの。こういうものを扱う商社マンでした。ローマ帝国あたりではキャラなどの香木よりも、乳香が大変に珍重されました。

彼の出自はコライッシュという部族の、有力なメッカの豪商の出身であります。その部族は金の牛とか、巨木とか、巨石などを崇める「偶像崇拜」に走っておりました。

「一神教」でいえば、はじめにBC400年ころのモーゼの「ユダヤ教」があり、次がキリスト教があり、これらが先行するのですが、人間の性として何かこの富の象徴を崇めたいという気持ちがどうしても出てくるものです。「見えない神」の信仰というのは人間にはなかなかできないものなのです。

そこで彼は、自分の出身部族であるコライッシュに反逆して、「一神教」に戻らなければいけないということを唱えました。実は彼自身がそう言ったのではなく、よわい40歳くらいまで貿易商社で働いていたところが、だんだん近くの山の洞窟に潜り込むようになり、そこで神の声を聞くようになったというのです。まったく文盲の商社マン・モハンマドが

神の声をだんだん聞くようになり、一種のシャマニズムといいますが、恍惚境のなかで不思議なる現象が起きるようになりました。

モハンマドの奥さんは、実は15歳年上の姉さん女房でして、「キャラバン・アンド・カンパニー」の女性社長でした。15歳年下のモハンマドは実直ないい青年だったようで、女性の方から口をかけて結婚いたしました。

そのモハンマドが初めて神の声を聞くようになった時、彼はオロオロ、ワラワラしまして、家に帰ってきたときに妻の膝にすがってブルブル震えていたと言われています。その時、なんでそういう現象が起こったのか奥さんにもわからない。そこで奥さんのハディースは、いとこのキリスト教徒のワラカという人を連れてきて「これは一体どういうことなのか」と相談したそうです。するとこのワラカは「神のお告げに違いない。気狂いになったということではない」と言ったそうです。

そしてモハンマドに従って、イスラーム教徒の第1号になったのが、15歳年上の奥さんのハディースだったと言われております。女性ですから「ムスリマ」の第1号です。

この話はイスラーム教がユダヤ教やキリスト教に敵意を抱いているとか、永遠に競争関係にあるということへの反証としてよく使われます。そういうことはないであります。

このモハンマドという人は、非常に人間くさい人であると思います。キリストは独身をずっと通しました。マクダラのマリアと関係があったとかいう映画もありましたが、一般には童貞で終わったのではないかとされています。

ブッダも「出家とその弟子」にありますように、まともな家庭生活を送ることはしなかった。

ところがこのモハンマドは11人の妻を持ち4人の娘をもっていた。家庭的な人で、「イスラームに入信したらみな家庭を持てよ」ということも言ってありますし、「家庭を大切にせよ」ということも言ってあります。

11人の妻については、現在でもイスラーム国家では4人までは合法的に認められておりますが、歴史的な背景を見ないと。単なる興味本位ではいけないと思います。

自分の出身母体であるコライッシュが、「モハンマドはけしからん。反逆者である」と追手をかけてきてとても布教するどころではなかった、布教するためには戦わなければならなかったもので、ずいぶん孤児や未亡人が出てきました。それを今風に言えば「社会保障」ですね、モハンマドの11人の妻については私も説明できませんが、いずれにしても「ちゃんと妻の面倒をみて、家庭人として家庭の幸福を追求することは大切だ」ということを言っています。

イスラーム教の人間の見方として、「性善説」でもなければ「性悪説」でもない、「性弱説」というのがあります。これは私が言っていることではありません。「性が弱い」という考え方、これは私の妻が文化人類学で向こうの男性、女性と付き合っただけで気がついたことです。「なぜ、男女を隔離するのか」　考えてみますと、いま日本でようやくそれがわかっ

てきたというか、たとえばラッシュアワーの満員電車で「女性専用車」ができました。そうになると、サウジのことをあまり笑えないと思うのです。日本でもそうしないとセクハラだの何だのといわれます。あの満員電車の中でエネルギーに溢れた若い男性が、何もしいというのが不思議なくらいで、それをちゃんとセパレートして、お互いに尊重していくということの方がリーズナブルではないかと考えられます。

結婚式に呼ばれましても、女性の居場所は、砂丘の向こうの別なテントということが普通です。男は男でこっちにいても歌舞音曲はなし、アルコールは飲めない、オレンジジュース、マンゴジュースでお腹ダボダボです。女性は誰も出てこない。嫁さんを見ようと思っても嫁さんは出てこない。

ところが婿さんだけは女性の方に行かなければならない。女性のテントは女性がいっぱいいます。テントの中はさんざめくような、きらびやかなファッションです。花嫁の父親や祖父も女性のテントの中に入れます。歌舞音曲もすごい。私なんか見たこともありませんし、お呼びもかかりません。これはサウジアラビアでもイランでも同じです。男である私は不満を感じましたが、これも「性弱説」で考えますと、やはり性の弱い我々のような者は中に入らない方がいいと考えられても仕方がないのです。

それからもうひとつ、「姦淫」の話をしてします。これはイスラーム法（シャリヤ）の最も厳しい刑法に関するのですが、サウジアラビアでもイランでも、現在でもときどき行われるようです。「姦淫」、すなわち不倫な男女の情事に対しては、石打ちの刑に処せられます。人々が広場に集まって、周りを取り囲み、大きくもない、小さくもない石を投げる。男は腰まで埋められて、女は乳房のところまで埋められて、それで死刑に処せられる。

これは極めて残酷ではないか？ モハンマドはそういうケースが自己の体験としてあったのですが、二番目の若い奥さんでアイシャという人がいましたが、布教のためにラクダのキャラバンで移動していました。ある日、彼女がイヤリングかブレスレットか、大切なアクセサリを落としてしまいました。あとでそのことに気がついて、そのラクダを引いていた若い青年と落とすとおぼしき所まで行きました。それで何とか見つけたらしいのですが、すでに何時間が遅れてしまいました。翌朝になると、モハンマドの弟子たちのなかで、「お前の奥さんはどうしたのだ。こんなに時間がかかったのは姦通したに違いない」ということで大もめ。モハンマドが判断することになりました。そのときにモハンマドが下した判定は、4人の証人を立てなければいけない。姦通の現場を見た4人の証人を立てるべし。もしそれが立てられない場合は、逆に偽証罪としてむち打ち80回という刑に処せられる。むち打ち80回というと、大体、死刑と同じかもしれませぬ。

そのモハンマドをアキューズ（告発）した政敵は、もう震え上がって、姦通罪はそこでは成立しなかったと言われています。現在でも4人のウィットネス（証人）を立てなければならないという法律は変わりません。ですから実質上は姦通罪はなかなか成立しないというのが現実です。

次に「よきイスラーム教徒とは何か」というと、モハンマドは次の3つのことを実行するのが善男善女であると言っています。

第一は、一神教を信じること、すなわち偶像崇拜はしない。

第二は、孝養を尽くす、自分の親に孝行をする。

第三は、偽証をしない。誤った証言をしない。

この三つがイスラーム教徒の三本柱ということになっています。

そんなことでモハンマドの人間像を考えますと、熟年者のかなり物分かりのいい人間像が浮かび上がってまいります。

## 日本にいるムスリム

日本とのつながりと言えば、最近の調査では日本にいるイスラーム教徒は、日本全体で5～6万人いるといわれています。しかしこれは法務省の入国管理ベースで合法的に滞在している人の数であって、日本人の信者は含まれません。日本人信者は5～6千人くらいしかいないと思います。これにオーバーステイイングという非合法的に滞在する人、特にバングラディッシュやパキスタン、インドネシアその他を加えると、恐らく25万人くらいはいるのではないかとされておりま。

日本ではほぼ全国的にイスラームの街ができあがっている、といえるのではないかと思います。

日本経済新聞に2008年10月に4回連載されました「身近なイスラーム」という記事がありますのでこれも参考にさせていただければと思います。

東京では代々木上原のイスラーム寺院が有名です。神戸、名古屋、大阪には古い立派なモスクがあります。その他にも埼玉県・春日部など、あちらこちらにあります。それに、そこまでいかない小さな祈祷所がずいぶんたくさんできています。

イラン人、パキスタン人、バングラディッシュ人、インド人でもイスラーム教徒はいますが、そういう人々が正式のモスク(英語ではmosqueですが、イスラームではアラビア語で「マスジド」)小規模の祈祷所は「ムサッラ」、このムサッラを入れると全国でずいぶんたくさんできています。

不思議なことに、外国人のイスラーム教徒(バングラディッシュ人、インド人、パキスタン人、インドネシア人)には中古車ディーラーがけっこう多い。あるいは小さな食品店が多いのです。

ご存じのように、食べ物に関してはイスラーム教徒にとっては清浄な(「ハラール」)食べ物しか食べない。後述するイスラーム金融とも関係しますが、豚に関するラードとか、豚の毛の歯ブラシとか、豚皮のカバンなど、豚に関するあらゆるものを厳密に排除します。

かつてインドネシアの現地工場で「味の素事件」というのがあったことを覚えている方も多いと思います。これなんか、別に味の素をつくる場合に豚の脂を入れたわけではない

のですが、豚の胃の触媒を一部使ったというだけで大騒ぎになりました。インドネシアも2億人以上の膨大な市場ですから、そこで風評被害も含めると大変なことで、もう今だから言ってもいいと思いますが、味の素さんは真っ青になりました。

イスラーム教で食べてもいい食品を「ハラール」といいます。食べてはいけないものを「ハラーム」といいます。小さな食品店を「ハラール・ショップ」といいますが、これはロンドンでも、ニューヨークでも、どこでも同じです。「ハラール・ショップ」では豚肉および豚に関連するものはいっさい扱っていないということです。ちょっとでも使っていれば、これは「ハラーム」である。これは「禁忌」といいますか、絶対に使ってはいけない。これが「ハラーム」であります。

東京では戸山高校の近くの久保とか、高田馬場商店街に「ハラール」だけを扱っているお店があります。

そういうことで、最近、岐阜、仙台、福岡、横浜にも小規模なモスクができるようになりました。これは非常に目立った動きであります。

日本が国策としてイスラームを研究し始めたのは、先ほど申し上げた大東亜戦争の前夜のこと、なにしろA B C D包囲（1941～2年、日本の東南アジア進出に対抗してとられたアメリカ、イギリス、中国、オランダの対日経済制裁）でしばられて、石油も来なくなりました。元をたせば日中戦争から始まって、次第にアメリカが日本に対して厳しい措置をとるようになっていました。そこでは日本は資源を求めてどこを目指したかということ、インドネシアを目指しました。侵攻する前にそこに住んでいる人はどういう人かということとを調べると、ほとんどがムスリムあるいはムスリマであることがわかってきました。

そこで、日本の国策として一番先にできたのが、名古屋モスクの1931年、次が神戸の1935年、東京の代々木上原が1938年でした。太平洋戦争の少し前にできております。

（注）当時、林銑十郎という首相（陸軍大将。独断で満州に侵攻。1937年2月首相）がいて、「大日本回教研究会」の名誉会長になり、大川周明（1886～1957 国家主義者。東大卒、満鉄入社後「猶存社・行地社・神武会」を結成。軍部に接近。五・一五事件に関与。A級戦犯）、前述の慶応の井筒俊彦先生なども研究員として参加していました。戦後の著名なイスラーム研究の学者はみなその主任研究員等として大川周明のもとに活動していました。

## イスラームの回帰現象

### （1）「ジハード」

「イスラーム」という語源から考えると、なぜそのような戦闘的なことが出てくるのであろうかとお思いになるかと思えます。

もともと「イスラーム」という言葉から「サラーム」という言葉が出てくるのですが、「サラーム」というのは「平和・平穩」という意味であり、イスラーム信徒同士が「こん

にちは」と挨拶するとき、「サラーム・アレイコ」つまり、「あなたの上に平安あれ」と挨拶します。すると相手の人は「アレイコム・サラーム」と返します。ですからイスラームは「平和・平穩」を願う宗教です。

私がカイロに勤務しておりましたときに、戸山同期（S27卒）「パイラス会」の連中が石川団長以下来てくれまして、大変嬉しいひと時をピラミッドの近くで過ごしたことがございます。そのときもお互いに「サラーム」を交わしました。

「イスラーム」というのは、「サラーム」=平和の宗教であります。これは間違いのないことです。前述のとおり、ユダヤ教とも、キリスト教とも兄弟関係にあるといってもいい一神教であります。原則はお互いに婚姻してもいい。他宗教に対しても寛容な宗教です。歴史の中でも決してホロコーストのような残虐な悲劇は起こっておりません。

しかし、敵と戦う場合には「ジハード」という言葉があり、これも確かにイスラーム教から出た言葉です。「聖戦」という意味ですが、ニューヨークで起きた2001年9月11日の同時多発テロも「ジハード」でした。パレスチナ問題その他で、唯一超大国のアメリカがやはり敵とみなされています。同時多発テロでは19人の高度な航空訓練を受けた、かなりのインテリがやった仕業でありまして、これは本当に恐るべきテロ行為でした。その実行犯の19人のうち15人は世界で冠たる大産油国サウジアラビア出身でした。

前述のとおり、こうしたテロ行為の背景には、イスラーム社会の人口の膨張、低年層の失業といった状況があったのではないかと、このへんのところはイスラーム社会の矛盾の現れということが言えるのではないかと思います。

この「ジハード」という言葉はさかんに使われております。イラクもようやく静かになりましたが、しかしアフガニスタンではまだまだ、オサマ・ビン・ラーディン一党の「アル・カーイダ」が、まさにこの「ジハード」の象徴のような戦いを多国籍軍とやっております。自爆テロもやっております。

しかし、このような現象だけとらえるのではなく、「ジハード」という言葉の誤解を解いておかなければいけないと私は思っています。

モハンマドが「ジハード」といっているのは、あくまでも日常の「努力」ということであります。ある目的のために努力する、就職のために努力する、あるいは入学のために努力する。あることを達成するために努力することが「ジハード」であります。英語でいえば「エンデバー」がもともとの意味です。

これが歪曲され、その後のイスラーム回帰現象の中で、1960年代あるいは今世紀の初めくらいに、エジプトあたりでこの「ジハード」を、暴力的な抵抗運動の旗印にしようというイデオログが現れました。それが今のオサマ・ビン・ラーディンだとか、アル・カーイダの思想的な背景になっています。「聖戦」というよりは、むしろ暴力的なテロ行為も、この「ジハード」という言葉で正当化されるということで、現在「イスラームはかなり危ない宗教だ」というイメージが広がっております。しかし少しでも、この「ジハード」という言葉に対して、正しい理解をしていただければと思います。

## (2) イスラーム金融

いま、経済界をあげてこの金融危機対策を考えておりますが、そこで「イスラーム金融」の話は少ししておきたいと思います。

現在、アメリカで「サブプライム・ローン問題」で住宅金融がはじけて、棄損した資本を埋め合わせるために、これは巨額な資金がいるわけですが、どこから金を引っ張ってこようとしているかということ、今のところ部分的にやっているのがアブダビとかカタール、クエート、それにシンガポール（中東から出てきた金をここに積んでいる）などのいわゆる中東系のSWF（Sovereign Wealth Fund、政府系ファンド）です。これが優良な資金源として注目されています。もちろん、彼らの貯めたペトロ・달러を誘引するわけですから、彼らにもメリットがなければなりません。彼らも何とかうまく運用したいということで、欧米の大手金融企業の救済にいま走り回っている、というのが現状だと思います。なかなか表面では見えませんが、日本の関係する金融機関、国際協力銀行等々もかなり活発に動いています。いままで日本はそういうイスラーム系金融機関と直のつながりはあまりありませんでしたが、そうもいってられないということでドバイ参り、あるいはクエート、カタールあたりにたくさんの方が飛んでいるのが現状だと思います。

何がポイントかということ「リバ」がいいかどうかです。食べる「レバ」ではありませんよ。正確に発音すれば「リブハ」ですが、これが「利子」のことです。モハンマド以来、イスラームでは禁止されてきたのがこの「リバ」ですが、たとえば株式でも「シャリーア（イスラームのビジネス法）適格銘柄」であれば投資することができます。クエート、ドバイ、シンガポール、マレーシアには「シャリーア・ボード」というのがあります。イスラーム法学者（世界に25人くらい、広げても100人しかいない）が適格性を判断します。たとえばマレーシアでは高名な「シャリーア・ボード」は3人くらい、高名なシェイクあるいはドクトルはみなひげを生やした、サウジアラビアの「シャリーア（イスラーム法）」を極めた人たち、あるいはエジプトの「アル・アズハル」という世界で一番古いイスラームの大学で「シャリーア」を極めた人たち、そこへ世界中の金融機関の人たちが日参して頼みにくる。ですからシャリーア天下です。「これはイスラーム法に照らして問題ないか」、第一はこの「リバ」がないこと、第二は豚関係の食料工場などではないということ、お酒はダメ、麻薬はダメ、イスラーム法に照らして適格かどうかの承認を得るために日参しております。

現在の金融危機で「シャリーアなど、どうでもいいや」という気がしないでもないのですが、さにあらず、ますます重要性を増しているというのが、現在の日本の財界・経済界ではないかと思えます。果たして中東産油国の期待にそえるかということ、そこがまた別の話であります。たとえば株式が「シャリーア適格」のハンコをもらったにしても、ではどれくらいの価格ならいいかということ、また別の問題です。正しい理解をお互いにしないとズレがどんどん出てくることになってきます。専門家に任せればいいのかというわけには

いかない。「シャリーア・ボード」の判断は実は実際の、現実的です。先にお話した「姦通」を立証するには4人の証人一人一人に「お前、何をみたか」と尋問して初めて最終判断がつくというような国ですから、「リバ(利子)」の問題にしても、「このくらいのリバならいいだろう」と思っても簡単にはいきません。投資先は物をつくるという産業資本ですから、事実上、かなり利子のエレメントは入っていても、「物をつくるからいい」のかどうか、落とし処にはいろいろな判断があってなかなか複雑です。

あれやこれや取り留めのない話をいたしました、この室に漂っている乳香の香りを少し覚えておいていただければありがたく思います。

本日はご静聴ありがとうございました。

#### 【質疑応答】

Q:(杉並城北会・中根 S22 卒)私、トルコに行ったことがあります、あそこは「リラクソド・イスラーム(世俗イスラーム)」だと言っていますが、あれはどういうふうに考えたらいいのでしょうか。

A:日本が日露戦争で勝って、一番喜んだのは「青年トルコ党」のアタチュルクだといわれています。アタチュルクは近代国家をつくろうと「政経分離でなければいけない」と考えました。しかし、最近は「イスラーム再興」といいますが、けっこう、イスラームを標榜した政党が政権についたりしています。早い話が、女子学生がイスラーム女性特有のスカーフをかぶるかどうかが、トルコでも大きな問題になっています。政経分離とはいっても、隣の国はイスラーム教条主義のイランですし、周辺国アラブの状態を見ても、けっこうイスラーム信仰が強いですから、トルコもEUに入ろうとして懸命に政経分離を強調していますが、足元ではなかなかそうはいかない、イスラーム信仰が盛り上がっているというような現状があります。

Q:(中根)トルコの人といろいろ付き合ったのですが、日常生活は非常にきちんとしています。お酒は飲まない、もちろん、豚肉は食べない。しかしお参りの方はそれほど熱心ではない。女性の教育は非常に進んでいる。官庁などでは日本よりはるかに女性が進出しています。そういうように、リラクソド・イスラームの方にいくのではないかなと、それが世界と一番うまくやっていく道なのではないかなという感じを持ったものですが、間違いでしょうか。

A:中東の中で、一番政経分離をしっかりやっていて、とくに経済の分野にはあまり介入しないようにしているのがトルコです。しかしそう言うものの、じわじわとイスラームの影響が浸透しているというのも事実です。そのへんがEUになかなか入りきれないという背景にもなっているのではないかなと思います。

Q:(三輪 S44 卒)キリスト教、イスラーム教というのは同じ一神教から出発しているが、仏教は違う。末端の経済社会までその違いが現われていると思うのですが、ところが今、

そのことによる弊害がいろいろ出てきています。将来への生き方、社会の構築において、日本の特殊性を含めて、将来への見通しはいかがですか。

A：大変大きな問題ですね。仏教は人が死んだときのお弔いとか、読経、座禅など、確かに内にこもるといことが最近目立つようになってきました。しかし、お寺によっては託児所だとか学校を営んでいるところもあり、社会福祉、社会奉仕をしようという面もあります。イスラームの場合は、昔から「弱者救済」が常に行われてきました。ラマダーン月といっても日没からは解禁になりますから、キリスト教でよくやるような救世軍（サルベージン・アーミー）の鍋のようなもので、そこで炊いた食事を弱者に分け与えるというようなことが街で普通に行われています。それをまた誇りに思っています。特にジハード（聖戦）をもって、イスラエルなどに戦闘的な行動をとろうとしているヒズボラとかハマスという過激イスラーム原理主義の連中が、貧民・弱者に対する医療サービスや社会奉仕をよくやるというので、アメリカもイスラエルも恐れているという面があります。仏教でも弱者救済はもともとあったと思うのですが、現在ではかなりのギャップが出てきています。やはり「あるべき姿」と「ある姿」の間には、ギャップがあることは否定できないと思います。

## 建築営業の甘い言葉に気をつけよう

城北会千葉支部支部長 尾崎 英二（S31卒）



建築業者の設計段階での説明と、建築後の建物では内容が異なることがよくあり、「手抜き」あるいは「だまされた」と気付いてクレームをつけても後の祭りということがありますので、これからアパート・マンションなどの建築を予定している方には後悔のないように、私の関係した事例についてご参考までに以下にご紹介いたします。

### 目黒区内の鉄骨造3階建の住宅の例

大手ハウスメーカー（以下D社とする）の設計施工により、鉄骨造3階建住宅を建築された建築主で、私のところに相談に来られたこんな例がありました。

当初、営業担当者はD社のパンフレットの平面図を見せて、D社の3階建であれば重量鉄骨材を使用して建物を造るので、地震にも強く安全であると建築主に説明しました。パンフレットの平面図では壁厚の寸法の倍近くの鉄骨柱で表現されていました。

ところが、設計図が完了して図面を見ると、鉄骨寸法が壁厚と同程度であり、当初の説明と異なるので不安になり、建築主は知人の構造に詳しい建築士に構造図をチェックしてもらいました。すると「確かに寸法は小さいが部材の肉厚が厚いので1、2階は重量鉄骨材である」ことがわかりました。しかし3階については肉厚の薄い軽量鉄骨材である事が判明しました。建築主はどうしたものかと私のところへ相談に見えたのです。

相談者の意向は「最初の約束とは異なるが、D社に施工してもらいたい」とのことだったので、私はD社と打合せをして、3階も重量鉄骨に変更してもらい、その他一部図面も設計変更してもらい見積り内容もチェックして工事契約を締結することが出来ました。建築主の要望により現場の工事監理（第三者監理という）も行って設計図通りの建物をまとめることが出来ました。

### 杉並区の木造（2×4工法）2階建ての住宅の例

建築主は海外生活が長かったので、住宅を建てるにあたって西欧風のオールブリック調（古いレンガ調の外壁）の建物を望んでいました。中堅のハウスメーカー（以下T社とする）と契約して完成して入居しましたが、その直後に外壁のエフロ（白華）現象が発生し、折角の外壁が白っぽくまだら模様となってしまったのです。相談を受けて私

は現場調査を行い、T社とも何回か打合せを行った結果分ったことは下記の通りでした。

1. 外構の塀にも同じタイルが貼られており同じくエフロが出ていたのでT社に塗装をしてエフロを直してもらっていたが、オールドブリック調が失われてしまい満足出来ない状況になってしまっていた。
2. 当初オールドブリックタイルはアメリカ製とT社は説明していたが、追及したところ韓国製であり、しかもタイルはセメントを固めたものに着色したものであった。しかも役物タイル（角のL型のタイル）は平板のタイルを切って貼りつけたものであり、これではタイルからエフロが出るのは当然であった。エフロは通常は目地部分のモルタルから経年変化により出る場合があるものである。カタログでは外壁はメンテナンスフリーとなっておりサギ行為と云わざるを得ない。
3. エフロのクレームのデータを出してもらおうと、この住宅の着工時点ですでに多数のクレームが出ており、T社で再塗装していることが分かった。T社としては再塗装させてほしいとの要望であったが、依頼者としては貼り直しを要求しているところである。

以上の2件の相談からわかることは、ハウスメーカーの設計施工の問題点は、営業は当然のことながら注文をとるまでが仕事で、建築主に口頭等で約束したことは設計や工事部門にその事情が伝わっていないことが多い。建築主は大手のハウスメーカーだからと安心してしていると、建物が出来て初めて異常に気がつくことが多い。

そこで私が申し上げたいのは、建築主は大手のハウスメーカーの設計・施工の建物であっても、監理だけは第3者監理として“ハウスメーカーとは別の建築家に”監理を依頼することです。こうしたことで自衛しない限り、この種のトラブルはなくなるんだらうと思います。

## 昭和 31 年同期生出版の表紙をネットで紹介

高橋 棟作 (S31 卒)

千葉支部会誌では、いつも貴重なお話を読ませていただき感謝しております。

少々僭越な感じもいたしますが、「同期生出版物の表紙画像をホームページで紹介」について投稿させていただきます。

我々昭和 31 年卒は「同期生公式ホームページ」で同期生の出版書籍を紹介しています。目的は同期生相互の懇親と、同時にその活躍を広く市中にアピールしたいためです。

お一人で数十冊ご出版のベストセラー作家の方々もおいでですが、3冊までで我慢していただいたため、一人一冊の自費出版でもリストに埋没せず、当面 25 冊を掲載し、徐々に増えています。

特筆すべきは、「表紙画像」も掲載したことです。当初は「著者名・書籍名・出版社名」という非著作権部分のみ掲載していました。しかし、ご著書の表紙画像を追加して見ると、臨場感があり、書店で戸山高校特設コーナーをみるようです。同時に医学専門書・児童書など平素見るチャンスの少ない分野での同期生の業績も拝見することにもなります。

具体的には：飯島善太郎 井野史子 井野博満 猪間明俊 小沢幹雄 桑田富三子 館澄江 内記稔夫 野口武彦 筆宝康之 守屋敦子 横川節子 渡辺幸男 渡辺藤一の各氏のご著書の表紙画像を掲載しています (2009 年末現在)。

ご承知のように、書籍表紙の画像をホームページに掲載するのは、「複製・公衆通信」に伴う著作権処理が面倒でほぼ不可能でした。図書を購入所蔵した公共図書館や公立学校でさえ、ネットでの図書紹介は表紙画像ナシがほとんどでした。しかし最近は何事か変わりました。インターネットの「ウェブサービス」技術で、大手オンライン書店の画像データベースが使えます。今回の成功から、次のステップとして同期生以外の同窓生著作の表紙画像も紹介し相互の懇親と母校の広報になるのではと思います。

同期生公式ホームページに関してですが、同期生のほとんどは昭和 12(1937)年生まれで、卒業 50 周年やら、古希を過ぎています。そんな年寄りが何でまたホームページをとお思いかもしれません。その理由は、私は同期生たちが「史料を残すことに対するこだわり」を

持つような気がしています。我々世代は、日本の敗戦と激変を特に幼児期に体験し、「熱狂的な大人たちの言説などはいとも簡単に変わるものだ」との醒めた思いが深いとの説があります。膨大な史料を読み解いて歴史物語を上梓されている某都立高校出身の女流作家も同世代のはずです。

我々の同期会幹事さんたちも「50年間の同期会出欠返信集」を大切にしておられました。数量的にはA4サイズで約1500枚となりました。この膨大な史料は、我々の個人史であり、時代史でもあります。これを、卒業50周年記念として残そうと考え、紙印刷では到底無理なので、デジタル化(=てんこもりCDと命名)しました。この記念CDと、さらなる追加を掲載し公開したのが、公式ホームページなのです。私も及ばずながら幹事さんたちのお手伝いしています。

50年記念誌からは、

**史料1・昭和56(1981)年寄贈植樹の「柏」:**(母校卒業25周年記念樹を寄贈しました、今もビオトープ地区で元気で嬉しいです! なお、卒業50周年は、エコファンドへの尽力をしました)

**史料2・校歌の楽譜と演奏:**(6・3の学制改定に際し「メロディーが同じなら先輩もともに歌える」と判断した校歌改定経緯)

**史料3・学園歌の楽譜と演奏:**(当時「新しい日本の歩みに合致した歌を制定しようとの主張があり、応募百一編で剣道と漢文の福島(ダイシエン)先生の作品が採択された学園歌経緯)

**史料4・往時の新聞記事:**(昭和28年戸山高入試倍率=1.5、予想学費965円)

**史料5・往時の教科書:**(高校体育・日本人のゼロ歳平均余命は50年)。

記念誌以外からの追加は、

**史料6・井原公男先生ご遺稿:**(作家の城山三郎氏と同じく海軍特攻隊でのご体験)

**史料7・武藤徹先生論文:**(39年にわたり数学を指導された先生が、1979年当時書かれた「昭和31年からの高校生言語能力の減退による学力低下」についての論文)

**史料8・柴田治先生追悼文集:**(昭和26年卒と昭和31年卒がそれぞれ作成)などがあります。

同時に、過去のみでなく、未来へのチャレンジも大切と思い、前述の「ウェブサービス」とか「ヴァーチャル同期会」(=国立情報学研究所が全国の小中高向けに提案しているNetCommons=ネットコモンズを利用した)もトライしています。

城北会ホームページにリンクしておりますので、どうぞ機会をみてご覧ください。

## 半世紀余の往時を訪ねて

福田 陽 氏 (S28 卒)

私が千葉縣民となったのは昭和21年8月であった。住居は千葉市小仲臺（現在は小仲台町）で、園生國民學校の學區であったが隣接する稲毛國民學校（稲毛町）に通学した。距離が2kmを超え、昨今の判断基準からはかなり遠距離徒歩通学とも思えるが苦痛ではなかった。この學校は、昭和16年4月に滿州國新京特別市櫻木在滿國民學校に入学してから転向を重ねて9番目の學校である。6学年の2学期と3学期に在学して昭和22年3月に卒業した。（2番目の滿州國新京特別市西廣場在滿國民學校は、城北会の石川忠久氏、石川正久氏と同時期に在学していたことが後年になって判明した。）

当時の稲毛町の西に国道14号があり、その先は東京湾の遠浅の海岸で漁業、潮干狩や海水浴が盛んであったが現在は遙か沖合まで埋め立てられ事業地や住宅地になっている。東側は総武本線の線路付近である。この中間に京成電鉄の線路がある。稲毛國民學校の生徒は概ねこの範囲から通学していた。京成電鉄の線路から海岸方向は古くからの住宅で反対側には新しく拓けた住宅が多かったようである。

稲毛國民學校は京成稲毛駅の西北西約400mに本校があり、私が在学した時期には同駅から東北方向の高台に分校があった。この分校は現存していない。この校地も學校の敷地ではない。この事柄の詳細は調べていないが、昭和10年代までに児童数が2倍程度に増加したものと、私は想像している。私が通学したのは本校で、6学年は3学級で、男生徒の学級、女生徒の学級および男女生徒混合の学級があった。私は混合の学級で、担任は若い男性の先生（当時は訓導と称した）であった。現行の電話帳にお名前が掲載されている。学級の生徒数は50名を超えていたと思う。机間を狭く感じていた。

当時は学制改革の計画が進捗していて、翌年度から現在の六三三四制となり、國民學校は小学校となった。私達だけが國民學校に入学し、國民學校を卒業した年代である。しかし、担任の先生も見通しが立たなかったようで、毎日暗くなるまで先生から補習を受けた。周囲の級友も旧制中学校の受験を目指していた。どの時期に新制中学校の創設が決定されたのかは記憶していない。

登校する時には、京成稲毛駅付近から學校近くまでの道路の両側で地元の女性達が赤貝を剥身に加工する作業をしている前を通行した。路面は砂と踏み砕かれた貝殻混じりであった。現在はアスファルト舗装になっていて、両側は平屋建てまたは二階建ての住宅が立ち並んでいる。

昭和22年4月に學校制度が変わり、私立中学校に入学した一部の者以外の大部分の

者は千葉市立第六中学校（現在の千葉市立小中台中学校）に入学することになったが施設の整備が未了であったので、名称が千葉市立稲毛小学校となったそれまでの教室で中学校の学習をしたが、体系的ではなかった。

5月初めに千葉市立第六中学校が開校し、稲毛国民学校と園生国民学校（当時は園生町に所在、現在は小仲台町に所在）等の出身者が入学した。校地は現在と同じで小仲台町に所在する。

学校の施設は旧陸軍防空学校の土地、二階建ての建物や車庫などを転用したものであった。生徒は国民学校高等科から編入した者も含めて3学年から1学年まで在学していたが、学級数は記憶していない。1学年は5学級はあったようである。多くの生徒が稲毛海岸駅付近から徒歩で通学していた。現在は、人口増加や学校増設に伴い学区が変更され、稲毛海岸駅付近の生徒はその近傍に所在する中学校に通学している。

旧陸軍防空学校の敷地は、総武本線の稲毛駅（往時は現在の西口側にだけ改札口）から県道を穴川方向に向かう北側にあり、約500mの位置にあった門（旧正門）から入り北方に通じる道路があった。その先にある谷を隔てた台地を含めた広大なものであった。小仲台町全体と大体符合しているようである。県道に沿った部分には防空用探照灯やさまざまな装備品の残骸がいくつも放置されていたが、旧陸軍の復員業務を所掌する留守業務局という官署があった。門には英語で標記（Bureau of...）した看板も掲げられていた。その門から北に向かう道路を進むと両側が水田である凹地を経てその台地に到達するが、その地区の東方に中学校が所在している。現在は千葉大学とその関連施設、高等学校、中学校、小学校など多くの教育施設や住宅地となっている。

県道の南側やこの敷地の西側は、当時は麦や甘藷の農地であった。これらの産物を求めに大勢の買い出しの人々が訪れていたものである。当時は、主食の配給は米、大麦、小麦、澱粉、甘藷、馬鈴薯、等をはじめ諸外国からの粗糖や落花生までその固有の重量を適用していたので、米、麦以外はカロリー換算値は同等でなかった。

新制中学校生徒になった当初は、高等学校の受験準備を考えたこともなかった。休憩時間にはスポンジ球による野球のような球技やビー玉、メンコ、ベー独楽による賭け事などが盛んであった。六三制野球ばかりがうまくなり、と揶揄されたのはこの頃ではなかったでしょうか。

私は2学年の昭和23年10月に船橋市立海神中学校に転入学した。この学校では国民学校高等科の編入者がなかったので、上級生はなく、また、海神国民学校の出身者だけで、各学年4学級であった。通学区域は総武本線の船橋駅と京成電鉄の京成船橋駅の西側から京成電鉄の海神駅付近の範囲であった。両船橋付近は古くからの住民で、海神駅付近には新しい拓けた住宅が多かったようで、稲毛と類似した傾向がある。総武本線の船橋駅の北側は東部鉄道野田線の単線の線路があったが、小規模の建物が点在していて大部分は農地で、総武本線の船橋駅から校舎が視認できた。総武本線と国道14号が交差（当時は平面交差）する付近から西方の南側は水田であった。

海神中学校では高等学校受験のための特別な対策であったのか、4学級のうち2学級が受験組、2学級が就職組であった。教育関係の多数の視察者や参観者が来訪されていた。一人の数学の先生（故人）は、3学年時に日曜日に熱心に補習をされ、十数人が自由に受講していたことが想起される。放課後のクラブ活動がいくつかあったが、有志で構成する野球チームの対抗試合に毎日のように参加していた。ボールはビー玉を芯にして古い毛糸や糸を巻き、8の字状に切断した帆布や帯芯などで包んで縫合して作成して使用していた。この頃の同期生との交友は続いている。

高等学校受験については、東京方面への交通の便がよいので、学区制はあったが、東京都に所在する国立、都立、私立に20名程度進学した。

寄稿依頼をいただいてから、それぞれの学校付近を歩いてみて、半世紀余が経過する間の地域開発、交通発達、人口増加、景観激変を実感させられた。

（文献を参照できず記憶と想像に基づいています。ご了承ください。）

## 谷村健次郎の思いで

白石翼、平松恒、黒木建雄（S34卒）

中学生時代から 白石 翼

黒木から、“谷村が逝ってしまったよ”と聞かされた時、あの谷村が？と耳を疑い聞き直した。

彼との交際は代々木中学校時代に遡る。どのように付き合いが始まったか、詳細は思い出せないが、1年生の時に同じクラスとなり、軟式テニス部に一緒に加入したのが始まりだったと思う。真夏の炎天下、お気に入りの白いテニス帽を深くかぶり、白球を追い続けていた姿が思いだされる。

確か2年生の秋だったと思うが、彼が後衛、私が前衛でペアを組み渋谷区の中学校の軟式テニス大会に参加し3位入賞を果たした思い出がある。谷村は、やや前かがみに構え黙々と粘り強くラリーを繋ぐ。彼の活躍でポイントを獲得した時、ナイス・ショットと声をかけると、照れくさそうにニヤッとし喜びを押しこころしていた姿が目浮かぶ。得意げな態度を見せることは決してなかった。

もう一つ「数学」に係る思い出がある。

谷村も私も、数学は好きな科目であった。2年生の時数学の先生に目をかけていただき、谷村ら数人で先生の下宿に遊びに行き、手乗り文鳥が飛び交う部屋でおやつをいただいたことが思い出される。こういう環境の中で共に数学への興味がさらに強まっていった。中学の卒業が近づいた頃、谷村から「代数学」という参考書があることを知らされた。私には、学校の教科書以外の勉強書との初めての出会いであった。本屋さんで受け取り、立派な外装本のページを開いた時、目に映った数式の詰まった紙面と新鮮な印刷の香りに一人前の大人になったような感動を覚えたことが今でも思い出される。心に残る思い出を残してくれた友に深く感謝をささげたい。

谷村は、仲間の中で強く自分の意見を主張するというよりは、やさしく全体を見守っているタイプであり、グループの舵取り役として大きな存在感があった。また、著名な弁護士であった父親のこと、戸山高校から東大へ進んだ秀才の兄のことなどについて本人の口から自慢気に何一つ聞いた憶えがない。いずれも周りの人から間接的に聞いたことである。

戸山高校及び大学時代に、夏になるとしばしば、谷村、黒木とともに八ヶ岳や南・北アルプスへ登山に出かけた。かなり厳しい行程であったが、運動部には所属していなかった筈の谷村が、運動部の猛者（黒木、白石）に伍して頑張りしかも飄々として同行し

ていた姿が思い出される。

なお、高校時代以後の思い出は、平松及び黒木に譲ることとしたい。

出来ることならもう一度再会し、谷村の「思い」を、彼の口から直接聞きたいこともあるが、問うてもニヤッと返されるのみかもしれない。

## 戸山時代のこと 平松 恒

「記念文集に谷村のことを書かないか」黒木の発案に、まずは卒業アルバムでも見ようかと押入れを探っていたら「昭和34年度卒業生講習会住所録」と「昭和35年度卒業生講習会名簿」が出て来た。アルバムは遂に見つからなかった。昭和34年の方を手にとってみる。ガリ版刷りでそうとう黄ばんでおり表紙には何やら大きな染みがある。捲ると石平校長以下6～70人の教職員の名前が並んでいる。イカポン、岩切さん、タコ、佐藤忠、ガンマー、ゾウさん、ブル、ダイシェン……。続いて生徒の名前。150人ほどいる。交友関係は皆無に近いのに同じクラスに居たことがあると言うだけで顔や姿が浮かんで来るのも不思議だ。

苦い記憶が蘇る。卒講の5月ハイキングで奥多摩の高水三山へ行った時のことだ。山好きだった私と黒木は「序でに、三山中の岩茸石山(793m)と峰続きに在る棒の折山(969m)まで足を延ばし、バレずに皆とは後で合流する」方法は無いものか事前に計画を練り、谷村・橋本を引き入れて実行した。かなりの強行軍であったが、ほぼ思惑どおりに事は運んだかと思えたが……。本隊の方の行程が急に予定より早まったとかで敢無く悪事露見、皆の前でガンマーのキツイお叱りを受ける結末となった。ガンマーこと柴田治先生は当時卒講の主任をされており、ハイキングの引率者もお元気にされていた。翌春、黒木と谷村は首尾よく巣立っていったが、私は後輩諸君と交じて昭和35年の方の名簿に名を連ねることとなった。橋本は駿台に鞍替えして去ったが今はどうしているだろうか。因みに2年目の卒講ハイキングは高尾山・景信山だった。

ガンマーには一方ならぬお世話になった。成績も態度もよくない私を心配されておふくろと経堂のご自宅に呼ばれたことがある。応接間のガスストーブ(電気だったかも)が赤く光っていたのを思い出す。冬の寒い日だった。何とか“一人前の大人”となって恩に報いるのが務めであるが、果たせぬまま今に至っている。

卒講以後も谷村との出会いは幾度もあったが心に残るものは思い当たらない。時が経つにつれて顔を合わせることも無くなり、たまに黒木を通じて消息を知るに止まっているうちに、突然彼の訃報に接することとなってしまった。告別式で、入院中の彼が終始明るく、爽やかで看護婦さんや患者さんの間で人気者だったと聞いた。常に自然体であり続けた姿を思い浮かべた。式の最後にされた奥さんの挨拶と、傍らに立つ成長された二人のお嬢さんの姿には参列者の心を安らかにさせるものがあった。

あれから20年経つ。この秋には黒木・白石と「谷村を偲ぶ」紅葉狩り追悼山行を計

画している。「うまく口実を付けやがって」と苦笑いする彼の顔が浮かぶ。ガンマーも着にさせてもらおう。

社会人まで

黒木 建雄

代々木中学ではクラスも異なり顔と名前を知っていた程度であったが、戸山で同級になり付き合いが始まった。お互いの家を行き来したが、代々木にある彼の家には本が沢山あり、また何時もお母さんが優しい顔でおやつを出してくれるので、こちらが押しかけた方が多かったと思う。お互いの兄同士も戸山で同期生だったと言うことはかなり後で知った。

結構頻りに付き合っていたが、お互いに多弁とは言えず、深い議論や突っ込んだ話をした記憶に乏しい。一緒に居るだけで何となく分かるという感じであった。二人とも数学に興味があり授業の合間に問題の解き方を議論したこともあった。2年生の夏休みに白石と3人で初めて登山をして見ようと言う事になり、八ヶ岳の縦走を行った。ほぼ順調に行ったが、下山時に裾野を近道して牧場を突っ切ろうとして牛の群れに追われ、ほうぼうの態で道無き道を沢沿いに下り、鉄橋をよじ登ってやっと線路に出たことを思い出す。これに懲りず、我慢の浪人生活を終え大学へ進学後に甲斐駒・千丈・白根三山・富士山・白馬・後立山等を歩き回ったことも思い出す。

その後夫々の進路は分かれ、私は日本レミントン・ユニバック（現、日本ユニシス）に入社し、当時は黎明期にあったコンピューターのシステム・エンジニアを目指した。会社のリクルート活動の手伝いで本郷に行った際、安田講堂の前でバツリ彼と再会した。彼は年限一杯大学生活を過ごしていたようだが、どこか良い会社は無いかと相談された。彼とサラリーマンやビジネスマンのイメージとは結び付け難かったが、丁度会社が総合研究所を別会社として設立していたので、その幹部の先輩に相談し早速面談の上OKとなった。その後両社は合併し、結局同じ会社の社員になった。職場は異なったが偶に社内顔を合わせ声を交わす機会もあった。

平成元年3月3日私が転勤先の名古屋から東京に戻ろうとしていた頃、突然奥さんから彼の訃報が電話でもたらされた。前年の10月から癌センターで食道癌と戦い、従容として永眠に就いたとのことであった。当時川崎製鉄知多工場に勤務していた平松がお膳立てしてくれて（彼も十二指腸潰瘍で精密検査直前であった）、一緒に信州有明温泉に行く予定であったが、急遽取止め共に千葉検見川での告別式に参列した。その時は全身から力が抜ける思いであったが、奥さんが非常にしっかりされており、二人の娘さんも立派に成人されていることに救いを見出したことが思い出される。谷村は学生時代から私より大人のところがあつた、人の中で和して同ぜず、オーケストラで言えばヴィオラのようにハーモニーを大切にし豊かにする存在だった。しかし、飄々として足早に先に逝ってしまった。

実は、同じ前年の10月に私も名大付属病院で胃癌摘出手術を受けていたが、その後運良く生き延びやりたい事をやっていたら、将に紙一重のことである。更に、何と白石もその3年前に同じ目に遭っていた事を後日再会の折に聞いて真に仰天した。当時はお互いに場所も離れており、また告知が未だ進んでおらず、聞いて驚きの連続であった。

振り返ってみると高校時代は一つの通過点であり、青春を謳歌したとは程遠い感があるが、谷村・白石・平松とはウマが合うと言うのが良く付き合っていた。後で分かったことには四人とも次男坊と言うのも奇縁であり、更に後付け解釈すれば東京生まれ育ちの為か山に憧れ良く親しんできた。その後平松が大学山岳部入りしたので、ラグビー部のシーズンオフに白石を誘い雪山を含め本格的な山行に連れて行って貰い山の奥深さを味わう事ができた。今では三人で出来るだけ乗物を利用しては、温泉がけののんびり山歩きからエベレスト展望トレッキングまで楽しんでいるが、その話で一献交わしている席に谷村健次郎が のおっと入ってきて話に加わっても全然おかしくない。

(補記)

本稿は戸山高校34年卒の卒業50周年記念文集(平成21年末発刊予定)に寄稿したものを転載させて頂いたものです。因みに、谷村健次郎君の最終住所並びに筆者たち3人の現住所もたまたま千葉県であり、この時期に千葉城北会から会誌への原稿募集を頂いたのも改めて縁を感じる次第です。

城北会千葉支部会誌 第6号

平成 21(2009)年 11 月発行

発行：城北会千葉支部

支 部 長 尾崎 英二(昭 31 年卒)

副支部長 斉藤 徳浩(昭 32 年卒)

顧 問 斎藤 和子(昭 29 年卒)

事務局：〒273-0042 船橋市前貝塚 270-25

本橋 輝明

電話 090-6021-7397

E-mail: mteruak@attglobal.net